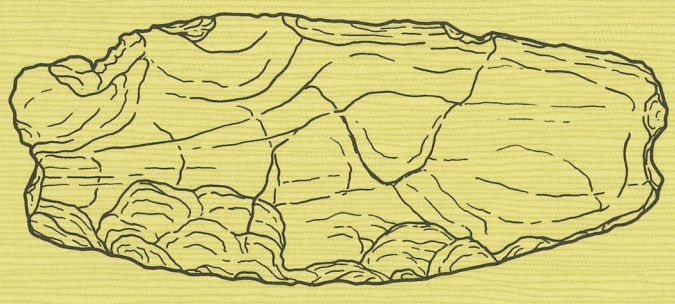
土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

林口遺跡

土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書



1998.1

高知県土佐市教育委員会

林口遺跡

土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書

1998.1

高知県土佐市教育委員会

序

土佐市は，四国三大河川の一つ，仁淀川の下流域に位置し，温暖な気候と豊かな自然の恵みのもと多角的近代農業，水産業，製紙業などを発展させてきました。

本市における歴史の起源は定かではありませんが，これまでに表採，出土した遺物等により少なくとも縄文時代から現代に至る人の営みがあり，近年の四国横断自動車道や国道56号線土佐市バイパスの工事に伴う発掘調査によりその様相が明らかになりつつあります。

今回の発掘調査は，市道藤並町林口清滝線の改良工事に伴うもので，平成8年度に高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと行われました。

調査では，掘立柱建物跡や石庖丁など弥生時代から近代に至る時期の遺物・遺構が出土し，土佐市の歴史を解明する貴重な手がかりを得ることができました。

ここに，今回の調査を土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集として発行するにあたり，本書が埋蔵文化財研究の資料として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが，本調査を担当した高知県文化財団埋蔵文化財センター第四係長（現第四班長）廣田佳久氏，調査員小野由香氏，調査にご協力をいただいた地権者・地元関係者の皆様，そして，発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より御礼申し上げます。

平成10年1月

土佐市教育委員会

教育長　阿部　光二

例言

1. 本書は，土佐市が平成8年度に実施した土佐市林口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと土佐市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は，土佐市教育委員会の依頼を受け，高知県文化財団埋蔵文化財センター第四係長廣田佳久（現在，同センター第四班長）の指導のもと，調査員小野由香が担当した。調査・整理業務の事務，総括は土佐市が行った。
4. 本書の執筆は第Ⅱ章を岡本裕介が，それ以外を小野由香が担当した。現場写真は小野由香が，遺物写真は廣田佳久が担当した。編集は廣田が行い，小野が補助した。
5. 遺構については，SB（掘立柱建物跡），SA（塀又は柵列跡），SK（土坑），SD（溝跡），P（ピット）で表示している。遺構番号は各遺構ごとの通し番号とした。また掲載している遺構の平面図は縮尺1/60，方位（N）は公共座標における方眼北である。
6. 遺物については，原則として縮尺1/3で掲載している。図版番号は，通し番号で写真図版の番号と一致している。
7. 遺構測量及び遺物の取り上げにあたっては，高知県文化財団埋蔵文化センターが土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査のために設置した3級基準点を使用した。また標高については，海抜高を示す。
8. 調査にあたっては，土佐市生涯学習課，土佐市建設課の方々並びに地元関係者の方々に多大な協力をいただいた。また，下記の方々に発掘調査，整理作業で協力していただき，同センターの諸氏からは貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

   発掘調査参加者

   池田和　上村道貫　上村文　桑名清治　澤松恭　宅間幸子　徳弘桂子　徳弘久美子　西村昭二　藤木諭　村田栄英

   整理作業

   徳弘久美子　山脇　功
9. 出土遺物は，「96－28TS」と注記し，土佐市教育委員会において保管している。

目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過 1
1. 契機と経過 1
2. 調査日誌抄 1

第Ⅱ章 遺跡の地理的，歴史的環境 3
1. 地理的環境 3
2. 歴史的環境 4

第Ⅲ章 調査の概要 7
1. 調査の方法 7
2. 調査区の概要 7
(1) A区 7
(2) B区 8
(3) C区 11
(4) D区 15
(5) E区 15

第Ⅳ章 遺構と遺物 19
1. 弥生時代 19
(1) 土坑 19
2. 中世 20
(1) 掘立柱建物跡 20
(2) 塀及び柵列跡 22
(3) 溝跡 22
(4) ピット 25
3. 近代 26
(1) 溝跡 26

第Ⅴ章 まとめ 29

挿図

Fig. 1　発掘調査風景1 1
Fig. 2　発掘調査風景2 2
Fig. 3　土佐市位置図 3
Fig. 4　周辺の遺跡分布図（S=1/25,000） 5
Fig. 5　遺跡の範囲と調査対象区域図（S=1/10,000） 7
Fig. 6　調査区設定図（S=1/2,000） 8
Fig. 7　A区西壁柱状図 8
Fig. 8　B区東壁セクション図 9
Fig. 9　B区第Ⅱ層出土遺物実測図 10
Fig.10　B区第Ⅲ層出土遺物実測図 11
Fig.11　C区東壁セクション図 12
Fig.12　C区第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物実測図 13
Fig.13　C区第Ⅵ層出土遺物実測図 14
Fig.14　D区南壁柱状図 15
Fig.15　E区TR－1～3西壁柱状図 16
Fig.16　B区遺構平面図（S=1/200） 17
Fig.17　C区遺構平面図（S=1/300） 18
Fig.18　SK－1 19
Fig.19　SK－1出土遺物実測図 19
Fig.20　SB－1 20
Fig.21　SB－2 20
Fig.22　SB－3 21
Fig.23　SB－2・3出土遺物実測図 21
Fig.24　SB－4 21
Fig.25　SD－1・2・8 23
Fig.26　SD－3・4 24
Fig.27　SD－5・6 25
Fig.28　SD－1～3・5出土遺物実測図 25
Fig.29　P－1～3出土遺物実測図 26
Fig.30　SD－9・11・13出土遺物実測図 28

表

Tab.1　周辺の遺跡地名表……5
Tab.2　出土遺物集計表……30

図版

PL.1　調査前A・B区全景(北より)
調査前C区全景(南より)
PL.2　調査前D区全景(北より)
調査前E区全景(南より)
PL.3　B区遺構検出状態(南より)
B区遺構完掘状態(北より)
PL.4　C区遺構検出状態(北より)
C区遺構完掘状態(北より)
PL.5　SK－1(東より)
SK－1(西より)
SK－1(南より)
SK－1遺物出土状態(35)
SD－1(西より)
SD－2(西より)
SD－3・4(東より)
SD－3・4(東より)
PL.6　SD－3遺物出土状態
SD－3遺物出土状態(45)
SD－3遺物出土状態(53)
SD－4(東より)
SD－4遺物出土状態(54)
SD－5(東より)
SB－4遺物出土状態(38)
P－3遺物出土状態(57)
PL.7　弥生土器(鉢)
弥生土器(甕)
PL.8　弥生土器(甕，鉢)
弥生土器(甕)

PL. 9　弥生土器(壺, 甕)
　　弥生土器
PL.10　土師質土器(杯)
　　土師質土器(椀)
PL.11　須恵器(鉢)・東播系須恵器(椀, 片口鉢)
　　青・白磁(皿, 碗)
PL.12　土師質土器(集合・杯)
　　瓦器(集合・椀)
　　青・白磁(碗)
　　土師質土器(杯)
　　石製品(石庖丁)
　　石製品(砥石)
PL.13　土師器(椀)
　　土師質土器(小皿)
　　土師質土器(小皿)
　　土師質土器(杯)
　　土製品(土錘)
　　近世陶器(碗)
　　石製品(砥石)
　　古銭(寛永通寶)

第Ⅰ章 調査の契機と経過

1. 契機と経過

林口遺跡は，火渡川の右岸の所在し，従来より縄文時代，弥生時代，中世の複合遺跡として周知されている。また平成7年度に実施された土佐市バイパスの試掘調査によって，字御所ケ内から12～13世紀（古代末～鎌倉時代）の遺構が確認されており，当該期を含めた遺構・遺物の存在の可能性が考えられた。

遺跡の推定範囲は約3,500㎡で，今回調査対象となったのは平成8年度に土佐市が計画している市道改良工事で影響を受けると考えられる約510㎡の範囲である。

調査は平成8年度に，土佐市教育委員会が調査主体となり，㈶高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施された。調査期間は平成8年11月12日～12月18日までの実働24日間であった。

2. 調査日誌抄

1996年11月12日から12月18日

11.12 本日より発掘調査を開始する。調査区は南からA～E区とする。A区は客土が厚く，湧水がひどいためB区から調査を行う。B区は北半部を遺構検出面まで重機で土層掘削を行い，その後遺構検出を行った。

11.13 A区の土層掘削を行う。遺物が2点出土したのみで，遺構は全く確認できなかった。土層の写真撮影，柱状図による記録を行い，A区の調査を終了する。B区は調査区北半部の東壁セクションの写真撮影と，検出遺構の略測図を作成する。

11.14 B区は調査区南半部を検出面まで重機で土層掘削を行う。清掃後，遺構検出状態全景の写真撮影を行う。B区と並行して，C区は重機で遺構検出面まで掘削を行う。厚いところで18cm程度の中世の包含層が確認できた。

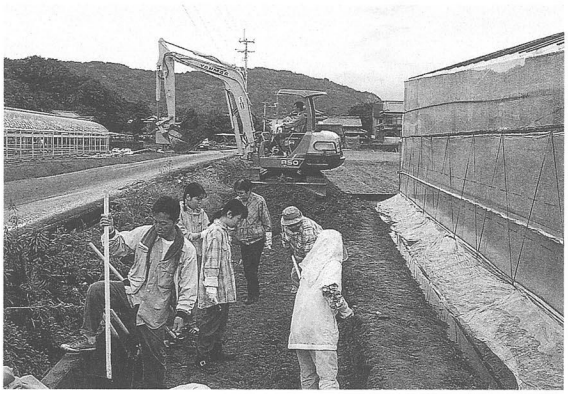


Fig.1 発掘調査風景1

11.15 B区は遺構の調査と東壁セクションの実測を行う。C区は昨日に引き続き，遺構検出面まで重機で土層掘削を行う。北半部は粘土化が著しく，遺構は確認できなかった。

11.18 B区の遺構調査を行う。北部から中央部までの遺構をほぼ完掘する。検出遺構のうち，ピットは全て中世の所産で，弥生時代のものと考えられるのはSK－1のみであることが判明した。出土遺物，及びバンクセクションの写真撮影を行う。

11.19 引き続きB区の遺構調査を行う。

11.20 B区南部の遺構調査を行う。C区は昨日に引き続き溝の掘削を行う。

11.21 B区はSD－3・4の調査を行う。

11.22 引き続きB区はSD－3・4の調査を行う。出土遺物からみて中世の所産と考えられる。調査区南部の遺構の平面実測を行う。

11.25 B区はSD－3・4・5・11等の調査を行う。

11.26 昨日に引き続き，B区は調査区北部の遺構

の調査を行うとともに，調査区南半部の遺構平面実測を行う。C区は土層確認のため，東壁の清掃を行う。

11.27　B区はSD－3・4の調査を行う。SD－3は土層から三層に分層できるが，出土遺物に時期差はみられず中世の溝と考えられる。またSD－3と切り合うSD－4は埋土にほとんど差がなく，同時期の遺構の可能性がある。B区の全ての遺構調査が終了する。

11.29　B区は調査区全体の精査を行い，遺構完掘状態の写真撮影を行う。しかし昼前からの降雨により作業は午前中で中止した。

11.30　雨天のため現場作業は中止した。

12. 2　B区は再度遺構完掘状態の写真撮影に備え，調査区全体の精査を行う。撮影終了後，北半部の遺構平面実測を行う。C区は東壁を精査するとともに調査区南端から遺構検出を行う。

12. 3　B区は調査区全体の遺構完掘状態の写真撮影を行う。本日でB区は一応調査が終了し，若干の補完調査を残すのみである。C区は遺構検出が終了する。遺構は南半部でのみ検出でき，北半部にはみられなかった。遺構略測図の作成を行う。

12. 4　C区は調査区全体の精査の後，遺構検出状態の写真撮影を行う。撮影終了後，遺構の調査を始める。

12. 5　本日は午前中雨天のため現場作業は中止し，午後から残っていたB区のレベル測量を行う。これにより，B区の調査は全て終了した。

Fig.2　発掘調査風景2

12. 6　C区の遺構の調査を行う。

12. 9　引き続きC区の遺構の調査を行う。調査区東壁セクションの写真撮影を行う。

12.10　本日は雨天のため全ての作業を中止した。

12.11　C区はSD－1の調査と並行して，調査区東壁のセクション図を作成する。C区の全ての遺構の調査が終了する。

12.12　C区全体の精査の後，遺構完掘状態の写真撮影を行う。D区の調査を開始する。D区にはトレンチを3ケ所設定し，重機で土層掘削を行った。その後土層の観察を行ったが，遺構・遺物とも確認できなかった。柱状図，写真によって記録した。調査トレンチの配置図を作成する。

12.13　C区は再度遺構完掘状態の写真撮影を行う。遺構の平面実測，レベル測量を行い，C区の調査は全て終了する。E区は調査区内にトレンチを3ケ所設定し，トレンチ1の重機掘削を行った。遺構・遺物とも確認できなかった。

12.16　E区トレンチ2・3の土層掘削を行う。トレンチ3で近代の暗渠を1条確認したのみで，遺物が両トレンチで少量出土したにとどまった。土層の写真撮影，柱状図を作成し記録した。また，調査トレンチの配置図の作成を行った。C区は重機による埋め戻しがほぼ終了する。

12.17　雨天のため作業を中止する。

12.18　発掘機材の撤収を行う。本日で林口遺跡の調査を完了する。

第Ⅱ章 遺跡の地理的，歴史的環境

1. 地理的環境

林口遺跡の所在する土佐市は，高知県中央部仁淀川下流右岸の東経133°25′40″，北緯33°29′34″に位置し，東西14.5km，南北6.4km，面積91.58km²の市域と31,615人の人口（平成9年4月1日現在）を有し，南東は土佐湾及び浦ノ内湾の湾口に面している。

この土佐市を地理的にみると，北部の虚空蔵山系と中央部の横瀬（御領寺）山系に挟まれる形で平野部が広がっており，南部は砂州及び海蔵山系の東端部となっている。虚空蔵山系は伊野町・日高村・佐川町・須崎市と境をなし，戸波積善寺の光明峠付近より東北東－西南西から北東－南西に山系の方向を変えている。市内においては，西方に向かって高度を増し，須崎市・佐川町との境界点である虚空蔵山々頂（674.7m）で市内最高位地点となる。横瀬山系は須崎市浦ノ内と境をなし，東北東から西南西に向かって山々が連なっており，市東部の用石・新居で仁淀川の浸食を受け，扇状地性低地を形成している。横浪半島を形成する海蔵山系は竜崎で海中に没している。

一方，平野部は，東部の高岡町とその周辺が仁淀川により形成された扇状地性低地で，以西がその支流である波介川によって形成された氾濫原性の低地である。また，虚空蔵・横瀬両山系から波介川に流れ込む小河川群は，各々の谷に埋積谷を形成している。南部の宇佐町の市街地が乗っている砂州は，沿岸流の運ぶ土砂が浦ノ内湾の湾口に堆積してできたものである。

今回調査の対象となった林口遺跡は，縄文・弥生・中世・近世の各時代からなる複合遺跡で，仁淀川右岸の扇状地性低地の中央部に位置しており，遺跡の周囲は北側から東側にかけて波介川支流の火渡川が流れており，西側は虚空蔵山系から派生した丘陵となっている。平成5年11月の分布調査において縄文土器，弥生土器，須恵器，土師質土器，白磁，青磁が表採され，平成8年3月に行われた試掘調査では12～13世紀と近世の遺構及び，土師質土器，瓦器，青磁，白磁等の遺物が確認された。

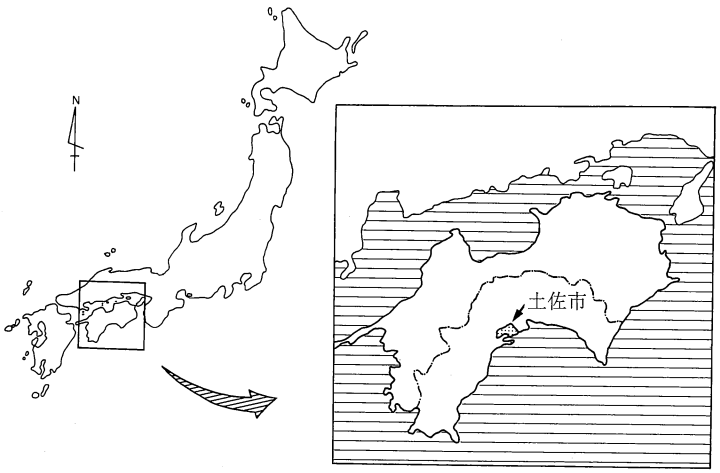


Fig.3　土佐市位置図

林口遺跡の周辺には，林口城跡，天神三島遺跡，天神遺跡，犬ノ場窯跡，野田遺跡などが所在し，このうち天神遺跡と林口遺跡等については，平成8年度から発掘調査が行われており，弥生時代から中世にかけての土佐市の歴史を解明する上で貴重な手がかりが得られるものとして期待されている。

2. 歴史的環境

土佐市では現在92の遺跡が確認されており，時代的には縄文から中・近世に及んでいる。高岡町とその周辺に半数近くの遺跡が集中しており，他の地域では北原・戸波両地区にまたがる丘陵上に比較的多くの遺跡が分布している。

市内最古の遺跡は，二宮神社近傍遺跡で，野田耕一郎氏により縄文草創期のサヌカイト製の尖頭器が発見されている。同遺跡では，他に縄文晩期の磨製石斧も発見されている。縄文時代の遺物は野田，倉岡，徳安縄文，居徳の各遺跡からも表採・検出されており，今回の調査対象である林口遺跡からも縄文土器が表採されている。

弥生時代になると遺跡数が大幅に増加する。波介万福寺遺跡では，広形銅矛と中広形銅矛が出土しており，この地で祭祀行為が行われていたと考えられる。波介地区では，他に銅剣形磨製石剣が発見されているが，波介地区のどの地点から出土したのかは不明である。また，用石甫木山遺跡は海抜70～80mの地点に位置する高地性集落跡である。この遺跡からは弥生中期末の住居跡の他，石斧，凹石，敲石，石錘，石庖丁，投弾，砥石，石鏃等が発見されている。この他に弥生土器等が出土する遺跡が市内のほぼ全域にわたって分布している。近年，四国横断自動車道や国道56号線土佐市バイパスの建設に伴う発掘調査で，大量の遺物とともに住居跡等の遺構も検出されており，今後土佐市の弥生時代に関する資料は飛躍的に増大するものとみられる。

古墳時代に入ると遺跡数は減少し，分布も高岡町近辺に偏るようになる。このうち古墳は4基確認されており，うち3基が現存している。宮ノ谷古墳は深見の谷より奥に上がったところに所在し，壊れた横穴式石室が確認されていたが，いつの間にかそれらの石も散逸してしまったらしいと伝えられていた。長らく古墳の位置を特定することができなかったが，平成5年の調査でその壊れた横穴式石室とみられる石室が発見されている。大サルバミ古墳も横穴式石室を持つ古墳で，石室の一部が現存している。股谷古墳は現在1基が現存するのみであるが，かつてはもう1基古墳があり古墳群を形成していた。また，現在は消滅しているが波介土居山にも古墳があったことが確認されている。

古代については，遺跡，文献ともに資(史)料が少なく不明な点が多い。しかし近年，高速道路，土佐市バイパス関連の試掘調査で，他の時代とともに古代に関する遺構・遺物も検出されており，なかでも犬ノ場窯跡は高岡郡下では数少ない須恵器窯跡であり注目されている。

中世に入ると再び遺跡数は増加し，遺跡の分布も市内全域に及んでいる。また文献の上では，平安末期の寿永元年(1182)，蓮池城主蓮池権守家綱が幡多の平田俊遠とともに，当時土佐国に流されていた源希義(頼朝の弟)を討ったとの記述がみられる。その後家綱は追捕使として派遣された伊豆右衛門尉有綱や香美郡夜須庄の荘官夜須行宗らによって討たれている。

鎌倉・南北朝時代を経て室町期になると蓮池城主大平氏が勢力を振るうが，戦国の動乱の中でしだいに衰退し，幡多から東進した一条氏に取って代わられる。その後，蓮池城は吾南・高東方面に進出した本山氏に支配されるが，一条氏は本山氏と対立していた長宗我部元親のもとへ使者を派遣し，蓮池城の奪回を図り，これに成功する。しかし元親の弟吉良親貞の策謀により，永禄12年

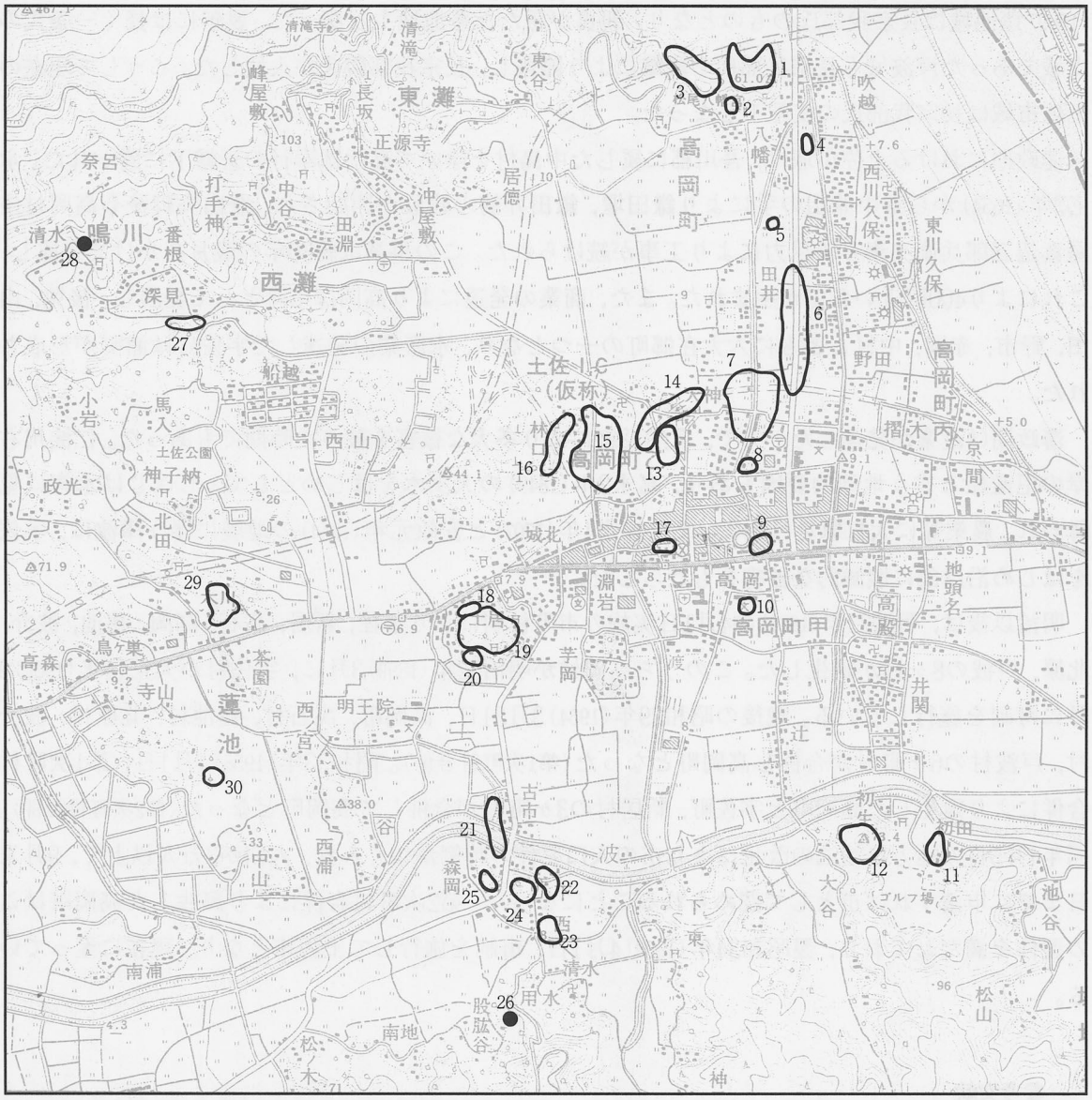


Fig.4　周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)

Tab.1　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	人麻呂様城跡	中世	11	初田遺跡	古代・中世	21	森岡遺跡	古墳
2	八幡遺跡	古墳	12	三宝山城跡	中世	22	倉岡遺跡	縄文・弥生
3	曽我山城跡	中世	13	天神三島遺跡	弥生～中世	23	波介西本村遺跡	中世
4	御太子宮遺跡	〃	14	天神遺跡	弥生・中世	24	土居山城跡	〃
5	八幡光本遺跡	古代	**15**	**林口遺跡**	**縄文～中世**	25	篠本山城跡	〃
6	野田遺跡	縄文～中世	16	林口城跡	中世	26	股谷古墳	古墳
7	光永・岡ノ下遺跡	古墳～中世	17	高岡本町遺跡	縄文～中世	27	鳴川深見遺跡	弥生
8	犬ノ場窯跡	古代	18	蓮池城北面遺跡	中世	28	宮ノ谷古墳	古墳
9	明官寺遺跡	古墳	19	蓮池城跡	〃	29	城ヶ森城跡	中世
10	明官寺大古遺跡	弥生	20	蓮池城南面屋敷跡	〃	30	寺山遺跡	〃

(1569) 蓮池城は長宗我部氏のものとなり，親貞が新たな蓮池城主となった。翌年には長く一条氏の支城であった戸波城も長宗我部氏の攻撃により陥落し，長宗我部親武が入城した。こうして現在の土佐市域は長宗我部氏の支配下となった。

藩政期における土佐市域は，吾川郡に属した中島村を除いて高岡郡奉行の管轄下に置かれた。承応3年(1654)から野中兼山の手により鎌田堰，鎌田井筋の建設が開始され，兼山失脚後も高岡村庄屋真辺五郎兵衛夫妻らの尽力により工事が続けられた。この事業は約30年の歳月をかけて完成し，これにより400町近い新田が生まれた。また，商業の発達により高岡は市町として発展し，後免，山田，野市，赤岡，中村とともに六大在郷町の一つとなり，水産業の発達した宇佐には浦町が形成された。

藩政期は産業が発達した一方で，自然災害により多大な被害を被った時期でもあった。仁淀川右岸の氾濫原と言う地理的要因もあり，嘉永2年(1849)の大洪水をはじめとして，しばしば水害に見舞われ，農業等に大打撃を与えた。また宝永4年(1707)と安政元年(1854)の地震に伴う津波は，宇佐をはじめ沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。

明治以後は，明治22年(1889)の4月1日実施の市町村制により宇佐，新居，高石，高岡，蓮池，波介，北原，戸波の8ヶ村が誕生した。このうち高岡村が明治32年(1899)3月に，宇佐村が大正11年(1922)9月に町制を施行している。戦後の昭和29年(1954)3月31日，高岡町，高石村，蓮池村，北原村，波介村，戸波村の6ヶ町村が合併し高岡町となった(第1次町村合併)。昭和33年(1958)4月1日，第1次町村合併により誕生した高岡町と宇佐町，新居村の3ヶ町村が合併して高岡町となった(第2次町村合併)。同年4月5日の地方自治法の改正により市の人口要件の特例がつくられ，人口が3万人以上で，9月末日までに申請すれば市として認められることになった。第2次町村合併により誕生した高岡町はこの要件を満たしており，翌昭和34年(1959)4月1日，市制を施行して土佐市となり，現在に至っている。

参考文献

『土佐市史』　土佐市編集委員会　1978年

『高知県遺跡地図』　高知県教育委員会　1996年

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査対象地区は平成8年度に土佐市が実施した市道の改良工事に伴うもので，南北に細長いことから調査区を南からA～E区に分け，南から調査を行うこととした。事前の試掘調査は行われなかったが，平成7年度に実施された土佐市バイパスの試掘調査からみて，遺構が遺存している可能性が考えられた。ただしA・D・E区は現況・地形からみて遺構・包含層が遺存している可能性は小さく，調査区にトレンチを設定し，その状況によって調査区を拡張することとした。

調査は高知県文化財団埋蔵文化財センターが，土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査のために設置した3級基準点を使用した。

発掘対象面積は約3500㎡で，発掘調査面積はA区39㎡，B区154㎡，C区278㎡，D区15㎡，E区24㎡で最終的な発掘調査面積は510㎡であった。

2. 調査区の概要

調査区をA～E区に分け調査を行った結果，遺構・遺物の残存が確認できたのはB区とC区のみであった。A・D区は現地表面下約1.1～1.3mで旧表土層が確認されたが粘土化が著しく，A区で遺物が2点出土したのみで，遺構は全く確認できなかった。またE区は元々湿地であったらしく，3ヶ所にトレンチを設定し確認作業を行ったが，近代以前の遺構は全く確認できず，遺物が9点出土したにとどまった。旧地形は，南から北に向け徐々に落ち込んでおり，E区の北を流れる火渡川の付近には湿地が形成されていたと考えられる。

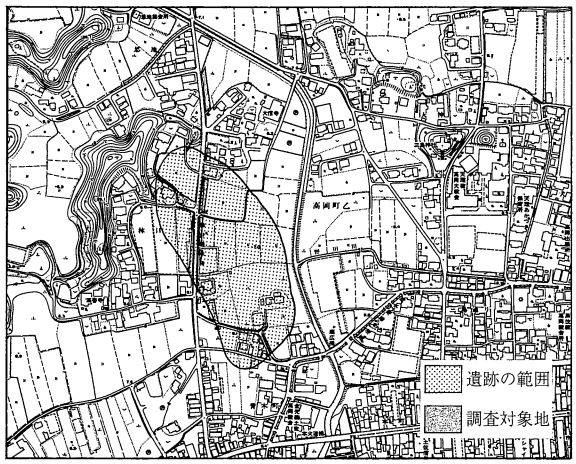


Fig.5 遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/10,000)

(1) A区

A区は南北に延びる市道を挟んで西側南端の調査区である。ビニールハウスに隣接しており，近世の削平と整地の影響を受けていた。調査区は幅2.0～3.0m，長さ15.5～16.0mを測る。1.5m×3.0mのトレンチを1ヶ所設定し，重機掘削により土層の確認を行った。現地表下約1.5mで遺物包含層が確認できたが，遺構は検出できなかった。また，遺物も2点のみの出土にとどまり，そのうち図示できるものはなかった。A区は湧水がひどく，トレンチ以上に調査区を広げるのが危険なため，それ以上の拡張は行わなかった。

層序

A区で確認された基本層序は以下のとおりである。

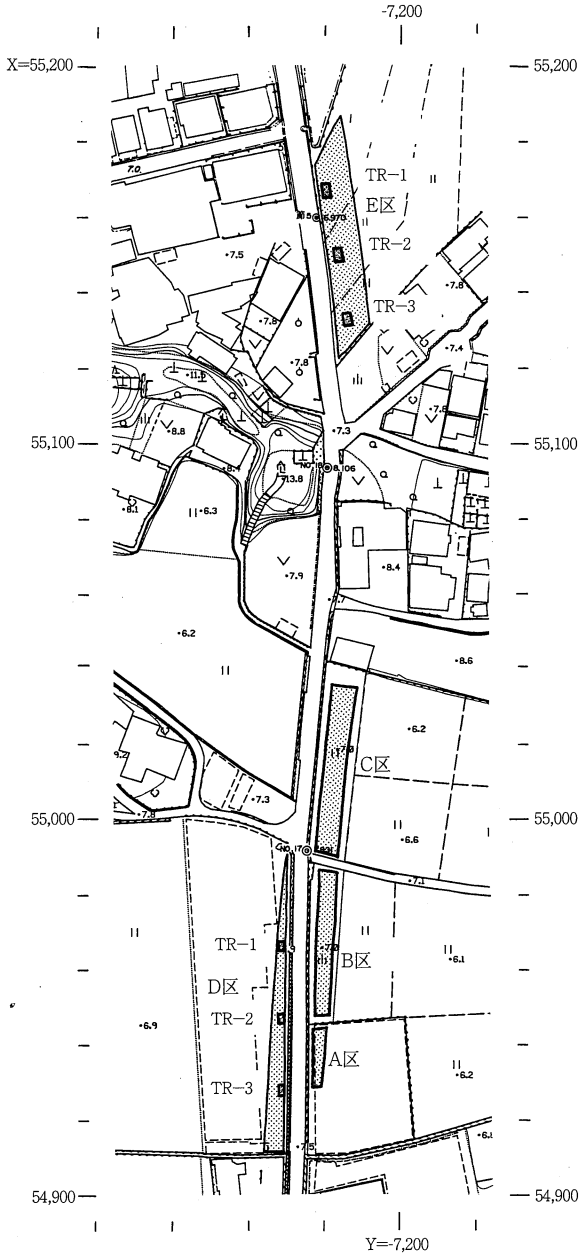


Fig.6　調査区設定図(S=1/2,000)

(2) B区

B区はA区の北に隣接した調査区である。調査区は幅3.7～4.7m，長さ37.1～38.7mを測る。調査区には縦横に昭和時代の暗渠が走っており，近代の影響を少なからず受けたことが窺える。今回の調査で遺構・遺物が確認できたのはこのB区とC区のみである。

第Ⅰ層　表土層(褐灰色粘質土層)
第Ⅱ層　灰黄褐色粘質土層
第Ⅲ層　黄褐色礫混じり粘質土層(客土)
第Ⅳ層　青灰色粘土層
第Ⅴ層　灰褐色砂質土層
第Ⅵ層　暗灰色粘土(遺物包含層)

層位中，第Ⅵ層が遺物包含層であったが，下層からは遺構を検出できなかった。また全体的に粘土化が著しい。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，現況は畑地であった。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に伴う床土と考えられる。

第Ⅲ層は耕作を行う際，旧地表面に盛られた客土であり，厚さ約70cmを測る。これと同様の層序がD区でもみられる。

第Ⅳ層は盛土が行われる以前の，旧表土層である。現地表下約1.1mで確認でき，旧地形は現在よりも1.0m以上低かったことになる。

第Ⅴ層も上層同様遺物は確認されなかった。

第Ⅵ層は遺物包含層で，厚さ約20cmを測る。2点の遺物が確認され，その内容から中世の包含層と推測される。ただし詳しい時期は不明である。

第Ⅵ層出土遺物

遺物は2点出土している。弥生土器の体部1点と土師質土器の体部1点である。どちらも細片で，器形・詳しい時期は不明であり，復元図示もできなかった。

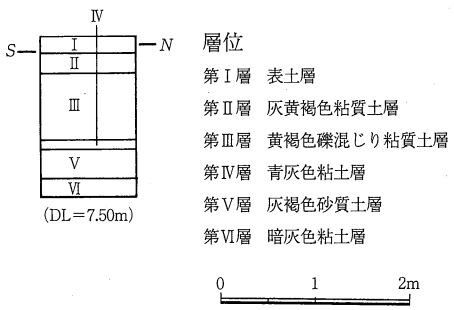


Fig.7　A区西壁柱状図

当調査区では弥生時代・中世・近代の三時期の遺構，弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の五時期の遺物が確認できた。また中世の遺構は層位的に二時期に細分できることが分かった。

層序

B区で確認された基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層(灰黄褐色粘質土層)

第Ⅱ層　暗灰黄色粘質土層(遺物包含層)

第Ⅲ層　灰黄褐色粘質土層(遺物包含層)

第Ⅳ層　黄褐色粘質土層

第Ⅴ層　暗灰黄色粘質土層(遺構検出面)

第Ⅵ層　黒褐色粘質土層

第Ⅶ層　明黄褐色礫層

遺物包含層は第Ⅱ層と第Ⅲ層である。どちらも中世の遺物包含層で，出土遺物からみても時期的に近いと考えられる。遺構は第Ⅱ層からの掘り込みのものと，第Ⅲ層以下からの掘り込みのものがみられる。

第Ⅰ層の表土層は現在の耕作土であり，現況は水田であった。B区も耕作地であったが水田として利用されていたため，盛土による整地は行われなかったようである。

第Ⅱ層は12～13世紀の遺物包含層で，厚さ3cm～8cmと極めて薄く，近世に削平の影響を受けたと

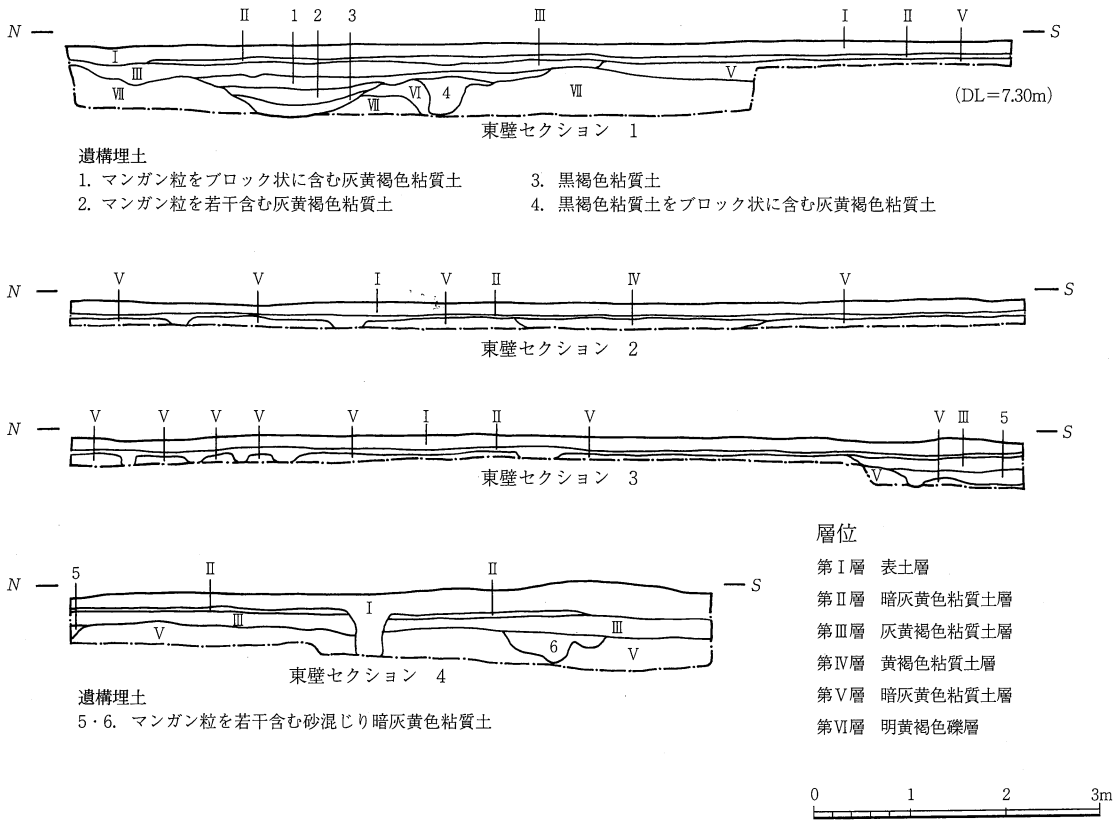


Fig.8　B区東壁セクション図

考えられる。第Ⅰ層と第Ⅱ層の境からは近世の陶磁器が出土している。

第Ⅲ層は北端部のSD－3・4の上層と南端部のSD－5の上層でみられた。中世の遺物包含層である。出土遺物は若干弥生土器が出土しているほかは，12～13世紀の遺物が確認されており，第Ⅱ層と時期的な差は余りないと考えられる。遺物の出土量は第Ⅱ層に比べるとやや少なめである。

第Ⅳ層は第Ⅴ層の粘土化，白色化したものと考えられる。遺物は認められない。

第Ⅴ層は遺構検出面である。

第Ⅵ層は地山直上の堆積層である。遺物は認められなかった。

第Ⅶ層は岩盤層であるが，湧水地にあるためか岩は軟化していた。

第Ⅱ層出土遺物

第Ⅱ層は表土層下で認められた厚さ3～8cmの遺物包含層で，出土遺物には弥生時代・古代・中世のものが認められるものの，主体をなすのは中世である。

弥生土器（Fig.9－1・2）

どちらも壺の破片である。1は大きく外反する口縁部である。口縁端部はヨコナデ調整を行う。外面はタテ方向にハケ調整，内面はナデ調整を行っている。器面は橙色を呈し，焼成は良好である。2は弥生後期の壺と考えられるが，類例がみられない。胎土も他の弥生土器に比べると細かく，混和材として黒雲母・長石・水晶が用いられている。色調は明赤褐色を呈する。2の壺は他地域からの搬入品の可能性が高い。

土師質土器（Fig.9－3）

底径が4.0cmと小さく，小杯と考えられる。平らな底部から内湾気味に立ち上がる器形である。底部は円盤状高台である。外面は指頭調整の後，ヨコナデ調整が行われている。底面に糸切り痕は認められない。出土土師質土器の中では比較的胎土が堅致で，焼成も良好である。ただし内面は剝落が著しい。

瓦器（Fig.9－4・5）

どちらも椀の底部の破片である。4は細片のため底径は不明である。底部のやや外側に，断面逆台形の低い高台がつく。内面には円圏状，見込みには平行線状のヘラ磨きが認められる。器壁には厚みがあり，焼成は不良である。また内面は黒褐色，外面は橙色を呈しており，摩耗が著しい。5は底径4.8cmを測り，直線的な底部外面に断面逆三角形の高台がつく。胎土は比較的堅致であるが，内外面とも摩耗が著しく，焼成はやや不良である。内面は灰色，外面は灰白色を呈する。4・5とも在地産の可能性も考えられる。

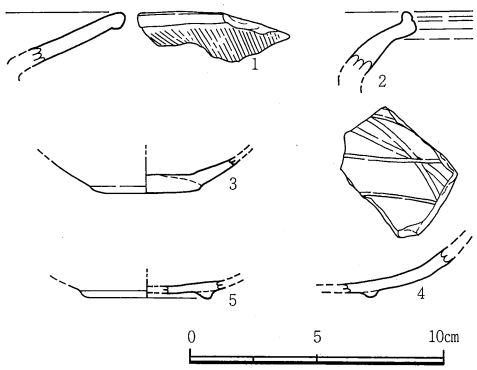


Fig.9　B区第Ⅱ層出土遺物実測図

第Ⅲ層出土遺物

B区の北端部及び南端部の，地形の落ち込み部に堆積が認められる。出土遺物は弥生時代と中世の遺物であり，中世の遺物は全て，12～13世紀の時間枠の中に納められる。弥生土器は細片のみの出土で復元図示できるものはなかった。

土師質土器（Fig.10－6）

平らな底部から，やや内湾気味に立ち上がる形態の杯である。口縁部を欠いているが，内湾気味に立ち上がるとみられる。底径は7.0cmを測る。焼成は不良で，内外面とも摩耗が著しい。

瓦器（Fig.10－7）

椀の口縁部の破片である。口径は12.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が残る。色調は内面が浅黄橙色，外面が灰黄褐色で内外面とも摩耗が著しい。焼成は不良である。

東播系須恵器（Fig.10－8～11）

器形には椀と片口鉢がある。8～10は椀の口縁部細片である。8・9の口縁端部は肥厚せず丸くおさめる。12世紀中葉～13世紀初頭の製品とみられる。10は口縁端部が肥厚する形態を持つ。時期的には若干落ちて13世紀前半～後半のものとみられる。いずれも口唇部には回転ナデ調整が行われている。8・10は焼成良好で，色調は灰色である。9は焼成がやや不良で灰白色を呈する。

11は片口鉢の口縁部片である。口縁部は直線的な立ち上がりをみせ，口縁端部の拡張はほとんどなされない。焼成は不良で土師質に近く，色調は灰白色を呈する。摩耗が著しく調整は不明である。

青磁（Fig.10－12）

同安窯系の皿である。底部の破片で，底径は5.2cmを測る。釉薬は灰オリーブ色を呈し，内外面ともに粗い貫入が入る。外底は露胎である。見込みには櫛描のカキ目文を施す。

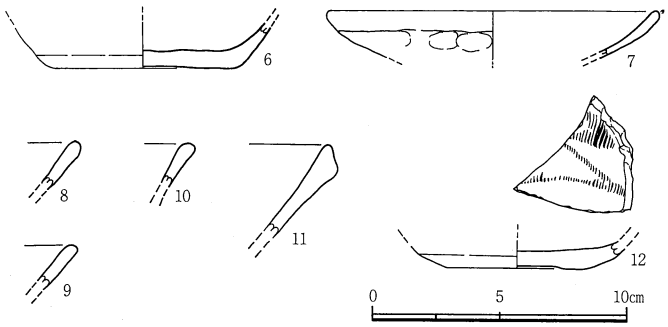


Fig.10　B区第Ⅲ層出土遺物実測図

(3) C区

C区はB区の北に位置する調査区で，幅6.2m，長さ43.3～44.5mを測る。C区では中世・近代の二時期の遺構と，弥生時代・古代・中世・近代の四時期の遺物が確認できた。また遺構・遺物とも調査区南半部に集中していた。北半部は粘土化が著しく遺構の残存は認められなかった。これはSD－1を境として南を生活面，北を非生活面とすることで理解できる。

層序

C区で確認された基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層（暗灰黄色粘質土層）

第Ⅱ層　暗灰黄色粘質土層

第Ⅲ層　暗灰黄色粘質土層（Ⅱ層に比べ色調が薄い）

第Ⅳ層　黄褐色粘質土層

第Ⅴ層　灰黄褐色粘質土層（遺物包含層）

第Ⅵ層　灰黄褐色粘質土層（遺物包含層。第Ⅴ層に比べ灰色が強い）

第Ⅶ層　暗灰黄色粘質土層

第Ⅷ層　黄褐色粘質土層

第Ⅸ層　灰黄褐色粘質土層

第Ⅹ層　黒褐色粘質土層

遺物包含層は第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層の三層が確認できた。

第Ⅰ層の表土層は現在の耕作土であり，現況は水田であった。

第Ⅱ層は床土であり，土層には鉄分・マンガン粒が認められた。北に行くに従い色調は若干明るくなる。また第Ⅰ層との境には約2cmほどの，鉄分を多く含んだ面が認められた。

第Ⅲ層は弥生時代・中世の遺物とともに近世以降の遺物が確認されており，後世の削平の影響を受けているとみられる。

第Ⅳ層は無遺物層である。

第Ⅴ層は中世の遺物包含層である。調査区の南半部に堆積がみられる。調査区の中央部付近では厚さ約30cmを測る。弥生時代・中世の遺物が出土している。

第Ⅵ層はSD－1の上層でみられ，厚さ25cmを測る。遺物は比較的まとまって出土した。中世の包含層である。

第Ⅶ層は無遺物層で，調査区の中央部から北でみられる。北部では粘土化する。

第Ⅷ層は遺構検出面である。

第Ⅸ層は無遺物層で，調査区南端部でのみ認められる。

第Ⅹ層は地山の上層にあたる。調査区の南端部とB区の北端部でみられる。

第Ⅲ層出土遺物

第Ⅲ層は出土遺物からみて近世の遺物包含層である。弥生時代・古代・中世・近世の遺物が確認されているが，出土点数は約150点と少ない。復元図示できるのは2点である。

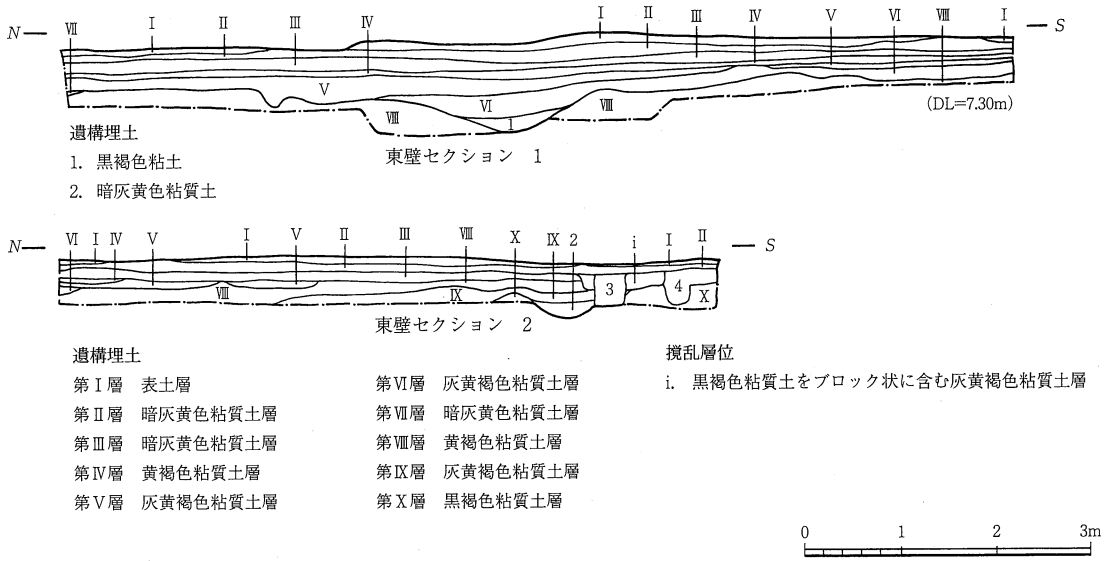


Fig.11　C区東壁セクション図

土師質土器（Fig.12－13）

足高高台を持つ椀の底部である。底径は7.6cmを測る。高台の裏側はヨコナデ調整を行っている。外面もヨコナデ調整と考えられるが，摩耗が著しいため詳しい調整は不明である。焼成は不良。11世紀に比定できる。

青磁（Fig.12－14）

龍泉窯系の碗の口縁部である。細片のため口径は不明である。釉薬の色調は灰オリーブ色を呈し，内外面とも細かい貫入が入る。青磁蓮弁文碗C群（註1）に分類される。

第Ⅴ層出土遺物

第Ⅴ層からは弥生時代・中世の遺物が出土している。出土点数は162点と少なく，そのうち約9割を12世紀～13世紀の遺物が占める。遺物は細片が多く，復元図示できたのは3点である。

弥生土器（Fig.12－15）

弥生土器の底部である。平底で，底径8.6cmを測る。焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。混和材には0.3cm以下の長石粒が含まれている。

中世須恵器（Fig.12－16）

鉢とみられる。焼成は不良で，生焼けである。内面は回転台を用いたヨコナデ調整を行う。外面は摩耗が著しく，調整は不明である。

白磁（Fig.12－17）

11世紀後半～12世紀前半に多くみられるタイプで，白磁Ⅳ類（註2）に分類される。釉薬の色調は灰白色を呈し，厚さ0.2mm程度と薄い。口径17.0cmを測る。

第Ⅵ層出土遺物

第Ⅵ層では弥生時代・中世の二時期の遺物が認められている。総点数36点と出土量は少ないが，比較的残りが良く17点を復元図示できた。

弥生土器（Fig.13－18～25）

弥生土器は8点が復元図示できた。うち前期とみられるものが2点，中期が1点確認できた。ただし出土点数は少なく，点の繋がりしが認められない。これらは流れ込みと考えられる。他5点は底部のみで時期は不明である。

18・19は前期土器とみられる。18は甕の口縁部細片である。体部は直立し，口縁部はわずかに外反する。口縁端部は外方につまみ出し，ヨコナデ調整を行う。端部には刻み目を施さない。突帯状を呈する。体部はタテ方向にハケ調整を施している。19は鉢の口縁部細片である。内外面ともナデ調整を行っている。

20は中期の甕の体部である。外面の体部上部にはハケ状工具を2段に押圧施文している。体部下半にはハ

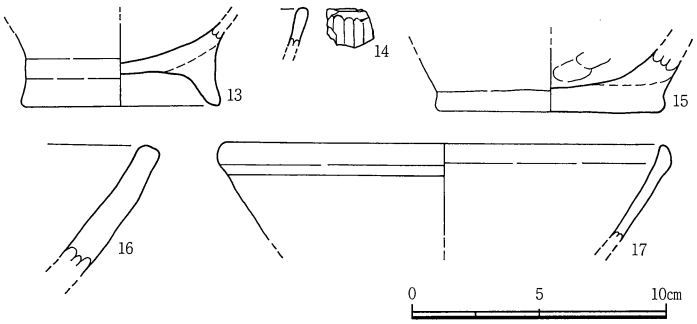


Fig.12　C区第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物実測図

ケ調整がみられる。内面には粘土帯の接合時の段が残っている。

21～25は弥生土器の底部である。底径は4.4～7.2cmを測る。21・24・25の体部は余り広がらずに立ち上がる形態を持つ。22・23は体部がやや広がり気味に立ち上がる。23は球形に近い形態を持つと考えられる。

石庖丁（Fig.13－26）

頁岩製の打製石庖丁である。刃部は粗く剝離され，全体的に粗雑なつくりである。両刃とみられるが，一方は剝離痕はあまりみられない。石庖丁の両側に抉りのはいる，打製Ⅰｂ類(註3)に分類される。中部瀬戸内と連動していれば，弥生時代中期～後期前半に比定できる。

土師質土器（Fig.13－27～32）

27～29は小皿である。27は手づくねで成形され，体部内面及び口縁部はヨコナデ調整が行われている。色調は灰白色を呈し，口径は7.5cmを測る。口径の割に器高は低く，やや扁平である。厚手で，口縁部はやや外反し端部は丸くおさめる。28は回転台成形である。口径8.0cm，器高1.6cm，底径5.4cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外上方に開く。底外面は摩耗が著しく，調整は不明である。29も回転台成形とみられるが，全体的に摩耗が著しく調整は不明である。口縁は直線的に外上方に開く。器高は1.0cmと低く扁平な小皿である。

30～32は杯である。全て回転台成形とみられる。30は口縁部の破片である。口径は14.6cmを測り，色調は浅黄橙色を呈する。31は底部の破片である。円盤状の底部に粘土紐を接合する手法がみられる。底径は7.2cmを測り，色調は明黄褐色を呈する。外底面は摩耗が著しく調整は不明である。32は31よりやや小さく，底径は5.3cmを測る。外底面は回転糸切りの後，ナデ調整を行っている。色調は

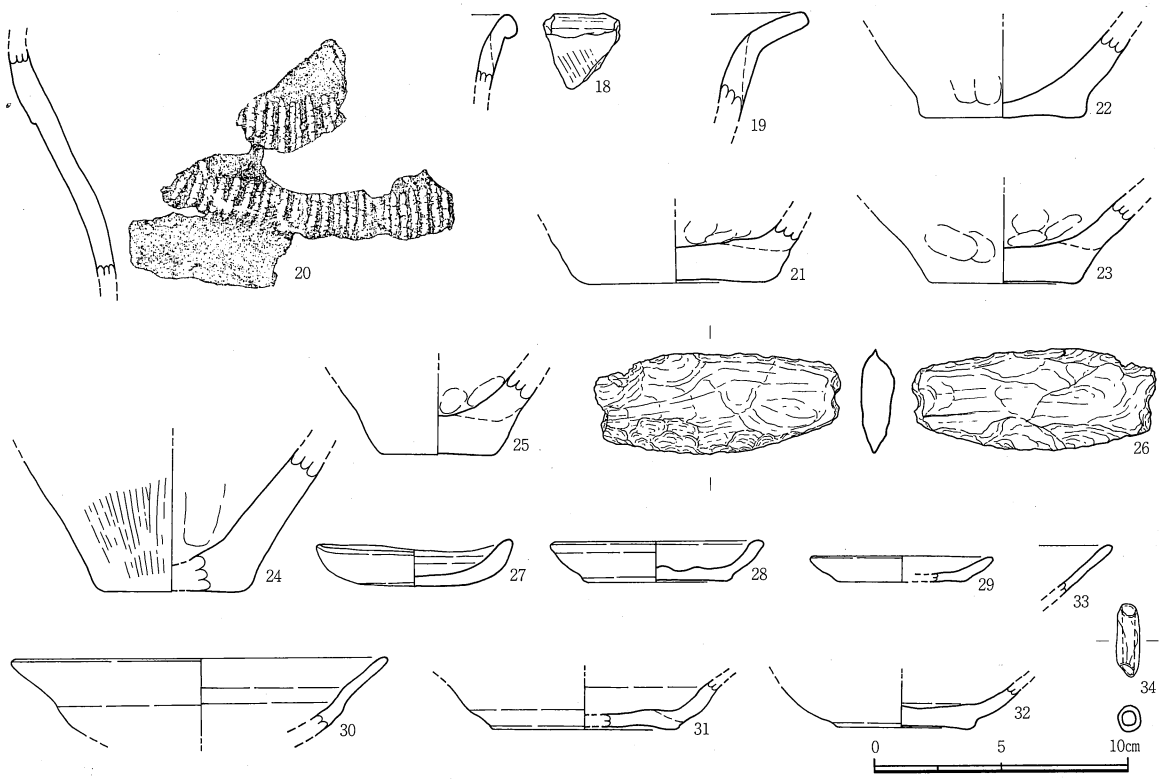


Fig.13　C区第Ⅵ層出土遺物実測図

浅黄色を呈する。30～32はいずれも完形ではないが，同形態のものと考えられる。これらは若干くびれた底部から内湾気味に立ち上がり，体部中位で屈曲した後，口縁部が直線的に外上方に広がる形態を持つとみられる。この形態のものは遺構からも出土している。

瓦器（Fig.13－33）

椀の口縁部の細片である。口縁端部はヨコナデ調整を行い，体部外面には指頭圧痕が残る。器面の剝離が著しく，焼成は不良である。

土製品（Fig.13－34）

円錐状の土錘である。にぶい橙色を呈し，焼成は不良である。長軸方向にナデを行っている。

(4) D区

D区は市道を挟んだ西側の調査区である。調査区A～C区の西に位置する。調査区は南北に長く，幅5～10m，長さ28mを測る。その中にトレンチを3ヶ所設定し，北から順にTR－1～3とする。1.7×3.0mのトレンチを3ヶ所設定し，重機土層掘削により，土層の確認を行ったが全て同じ様相を呈していた。D区の西はビニールハウスと隣接しており，ハウス建設の際の客土が約0.8～1.0mの厚さで堆積していた。現地表下約1.1～1.3mで旧耕作土が確認され，更に下層まで重機で土層掘削を行ったが遺構・遺物とも検出できなかった。D区も湧水がひどく壁面の崩落の危険があり，また遺構・遺物とも確認できなかったため，全面の調査は行わなかった。

層序

D区で確認された基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層（褐灰色粘質土）

第Ⅱ層　黄褐色粘性砂礫土層（客土）

第Ⅲ層　褐色粘性砂礫土層（客土）

第Ⅳ層　灰色粘土層

遺物包含層は確認されなかった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で現況は畑地であった。

第Ⅱ層は客土で，厚さ34～50cmを測る。

第Ⅲ層もⅡ層と同じ客土であるが、若干色調が異なる。厚さ30～55cmを測る。

第Ⅳ層は旧表土層である。遺物は全く確認されなかった。

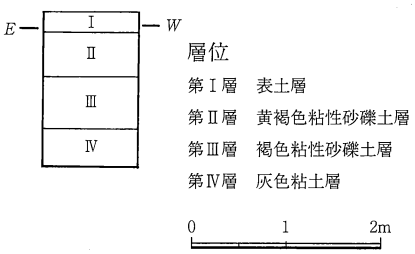


Fig.14　D区南壁柱状図

(5) E区

E区は市道の東側にあり，C区から約90mほど北に位置する。市道に沿って，2.3×3.5mのトレンチを3ヶ所設定し，北からTR－1～3とする。TR－1は，湿地状に落ち込んだ部分にあたり，遺物・遺構とも確認できなかった。TR－2は遺構の検出はできなかったが，遺物は7点確認できた。TR－3では近代とみられる暗渠が1条確認された。また遺物が2点出土している。TR－2・3は自然の落ち込みの肩部にあたるため，遺物の流れ込みが認められた。土層の堆積から，以前は北に向かって傾

斜する地形であったことが確認できた。E区は現況でも湧水がひどく湿地状になっており，遺構・遺物の出土は望めないため，トレンチ調査のみで終了した。

層序

E区で確認された基本層序は以下のとおりである。

TR－1

第Ⅰ層　表土層(黄褐色粘土)

第Ⅱ層　黒色粘土混じり灰色粘土層

第Ⅲ層　灰色粘土層

第Ⅳ層　砂混じり黒褐色粘土層

第Ⅴ層　灰色粘土層

遺構・遺物包含層は確認できなかった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で現況は水田であった。

第Ⅳ層は砂混じりの粘土層で，自然遺物が多く含まれていた。しかし人工遺物は確認できなかった。

TR－2

第Ⅰ層　表土層(黄褐色粘土)

第Ⅱ層　灰色粘土層

第Ⅲ層　黒褐色粘土層

第Ⅳ層　灰色粘土層

第Ⅴ層　黒褐色粘土層

第Ⅵ層　灰色粘土層

遺構の確認はできなかったが，遺物は7点出土している。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層からは，土師質土器の体部の細片が出土している。

第Ⅴ・Ⅵ層には植物が多く遺存していた。第Ⅴ層以下は自然の落ち込みとみられる。また第Ⅵ層からは弥生土器の細片が1点出土しているのみである。

TR－3

第Ⅰ層　表土層(灰色粘土)

第Ⅱ層　黒褐色粘土層

第Ⅲ層　灰色粘土層

第Ⅳ層　灰色粘土層(第Ⅲ層よりも色調が薄い)

遺構は第Ⅰ層より掘り込まれた，近代と想定される暗渠が1条確認できた。ただし暗渠内から遺物は出土していない。遺物は第Ⅳ層で2点確認されている。

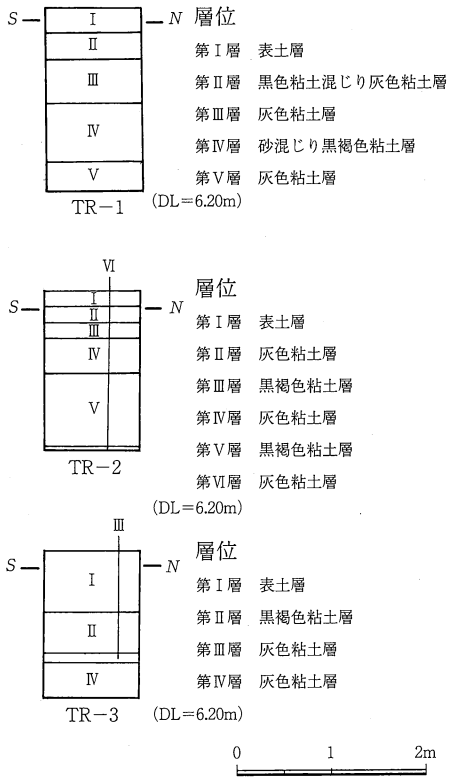


Fig.15　E区TR－1～3西壁柱状図

第Ⅰ層はTR－1・2の第Ⅱ層と対応する。

第Ⅱ層は植物遺存体を多く含む。

第Ⅲ層は無遺物層である。

第Ⅳ層からは土師質土器細片と，古墳時代とみられる須恵器片が各1点出土した。

以上，E区出土遺物は全て細片のため，復元図示できなかった。

註1;小野正敏氏の分類に依る。
註2;山本信夫氏の分類に依る。
註3;平井勝『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社

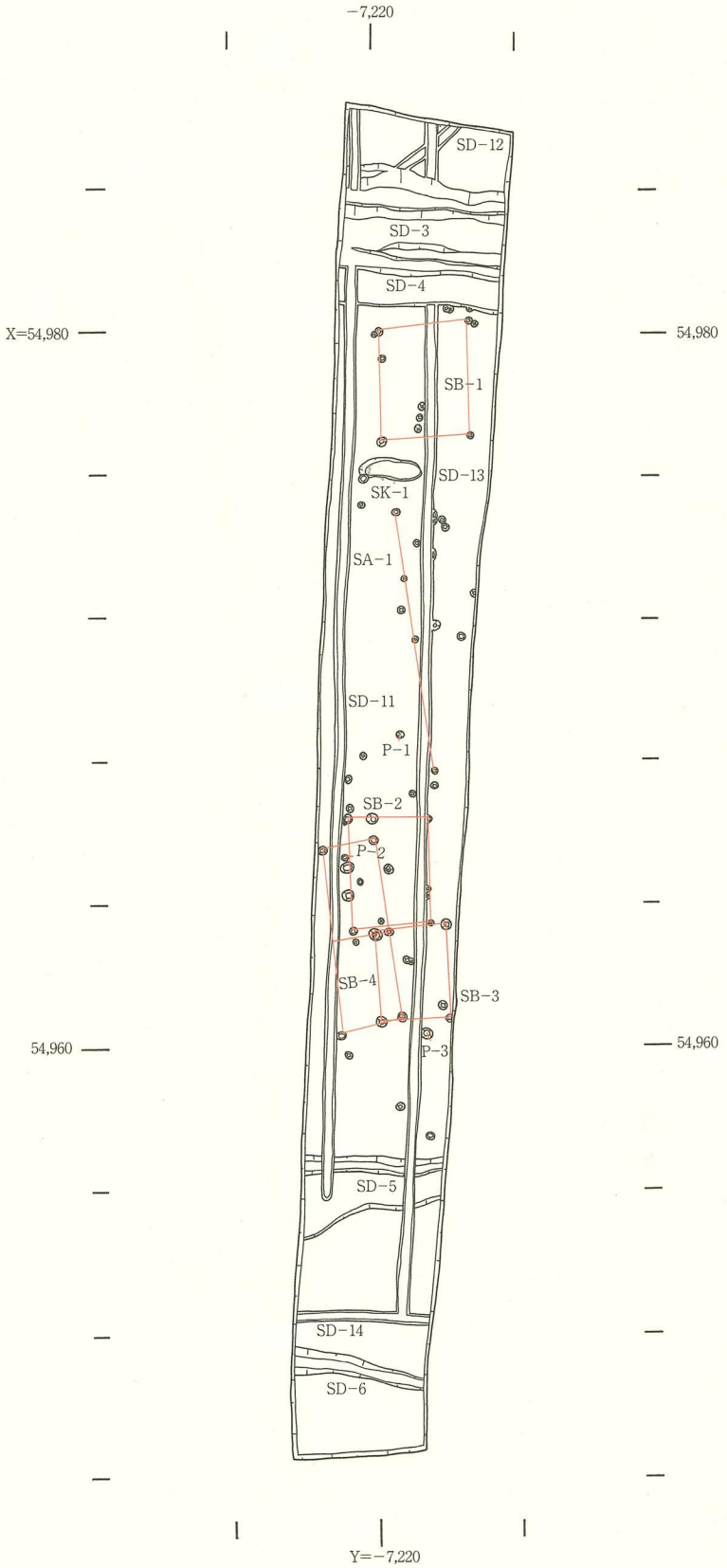


Fig.16 B区遺構平面図（S=1/200）

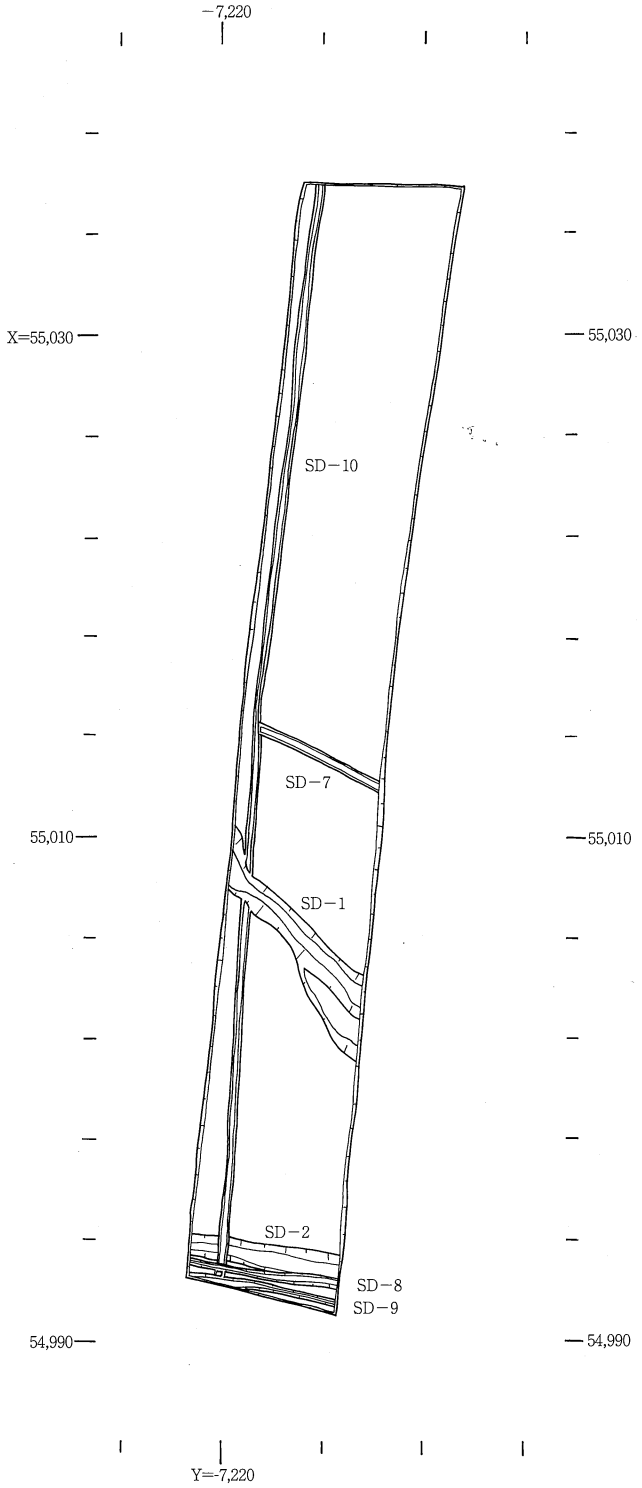


Fig.17 C区遺構平面図（S=1/300）

第Ⅳ章 遺構と遺物

本項では，調査区A～E区までを一括して，時代別に掘立柱建物跡（SB），塀又は柵列跡（SA），土坑（SK），溝跡（SD），ピット（P）の順に主だった遺構について記す。遺構番号は通し番号とし，調査区ごとに区分はしていない。

1. 弥生時代

調査区B区の北西部で，土坑が1基確認されたのみである。全般的に後世の影響がみられ，弥生時代の遺物が中世の遺物と共伴していることから，特に中世の段階で，弥生時代の遺構は削平されたと考えられる。

(1) 土坑

SK－1

B区の北西部で検出された土坑である。東西方向に長い楕円状の平面形を呈し，中世と考えられるピット1個に切られていた。長軸方向はN－86°42′－Wを示す。長辺1.70m，短辺0.57m，深さは6cmとかなり浅い。埋土は暗灰黄褐色粘質土であった。遺物は弥生土器15点が出土しており，そのうち鉢(35)，甕(36)の2点を復元図示することができた。

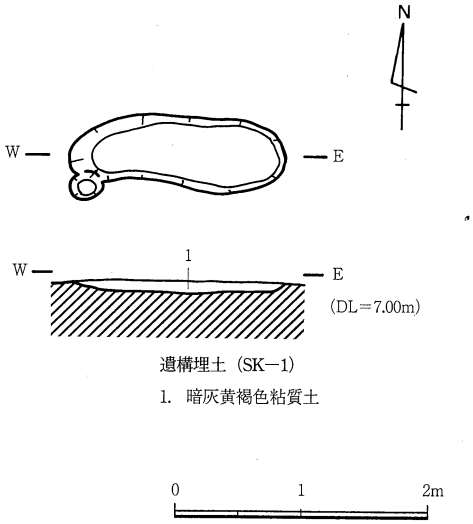


Fig.18 SK－1

出土遺物

弥生土器（Fig.19－35・36）

35は鉢で口径30.0cmを測る。口縁部は大きく外方向に広がり，口縁端部には凹線文を1条めぐらせる。胴部から底部にかけて強い角度ですぼまり，かなり浅い鉢になるとみられる。最大径は口縁部にある。内面はヨコ方向に2度以上ハケ調整を行った後，胴部上位の屈曲部はヨコナデ調整を施す。外面は口縁部から屈曲部ま

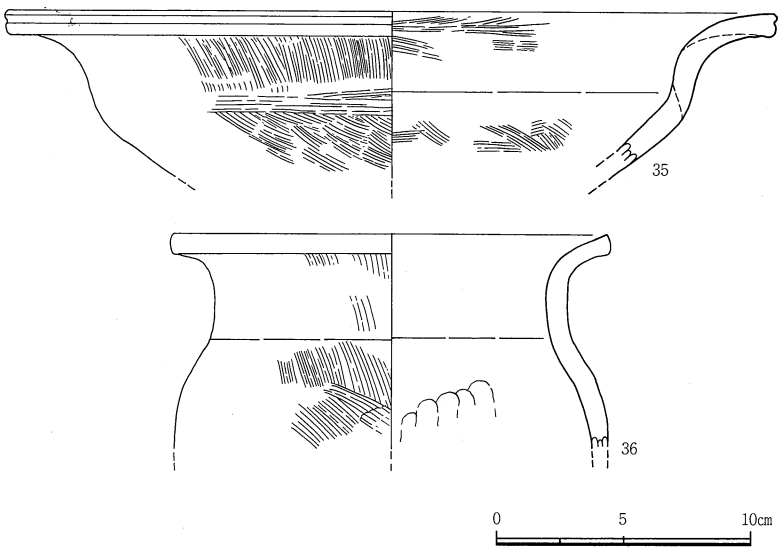


Fig.19 SK－1出土遺物実測図

でタテ方向，屈曲部はヨコ方向，胴部下位は斜方向に2度以上のハケ調整を行っている。焼成は良好で，胎土には0.4cm以下の石英粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。

36は甕である。口径は17.2cm，胴部径は17cmとほぼ同じ大きさを測る。口縁部はやや強く外反し，頸部は直立する。頸部と胴部の境には，若干のくびれがみられる。内面はヨコナデ調整が行われるが，胴部上位には指頭圧痕が残存している。外面はタテ方向にハケ調整を2度以上行っている。煮炊きに使用されたためか，胴部には煤が付着しており，器面の剝落が著しい。35・36とも後期初頭に位置付けられる。

2. 中世

調査区B区全域とC区南半部で認められた。遺構はC区の中央部以北からは検出されておらず，また居住用とみられる掘立柱建物跡はB区でしか確認されていないことから，遺跡の中心はここからやや外れた場所にあったものと考えられる。全般的に近世以降の削平の影響がみられ，遺存状態は良好とはいえない。今回の調査で確認された遺構は，掘立柱建物跡4棟，塀又は柵列跡1列，溝跡5条，ピット46個などである。

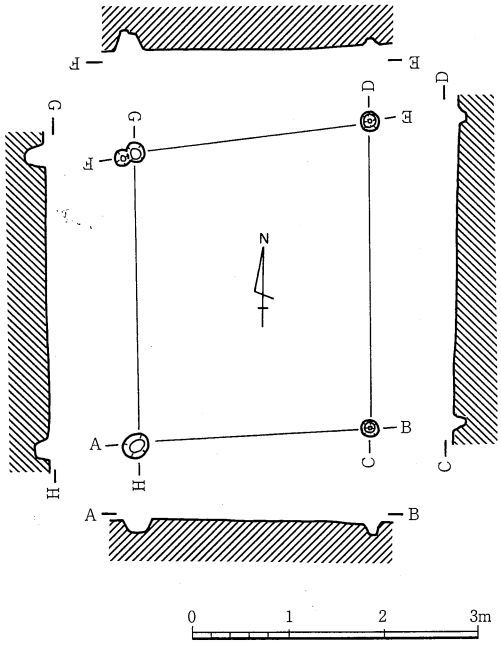


Fig.20 SB−1

(1) 掘立柱建物跡

SB−1

B区北部，SD−4の南で確認された梁間1間（2.5m），桁行1間（3.0〜3.2m）の南北棟建物である。また，すぐ北に位置するSD−4とは角度的にほぼ並行する。棟方向はN−1°−Wである。柱穴は径15〜28cmの円形で，柱径は10cm程度であったとみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色粘質土であった。遺物は南側の柱穴2個から若干出土しており，各器種の総点数は弥生土器片2点，土師質土器片3点であった。しかし復元図示できるものはなかった。

SB−2

B区中央部で検出した梁間1間（2.2m），桁行1間（3.0〜3.1m）の南北棟建物である。ただしこの建物は西の柱通りに柱穴が検出されており，梁間1間，桁行2間の建物になる可能性がある。その場合，桁行の柱間寸法は約1.4〜1.8mである。SB−3と近接し，SB−4とは重なっている。棟方向はN−1°−Wである。柱穴は径18〜24cmの円形で，

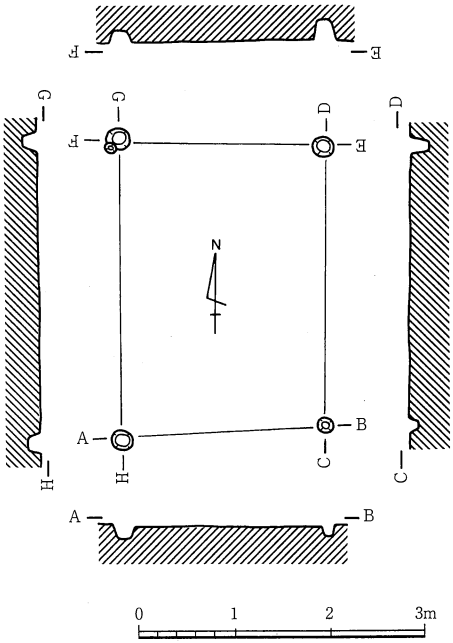


Fig.21 SB−2

柱径は10cm程度とみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色粘質土であった。遺物は2個の柱穴から土師質土器片が9点出土している。このうち北東隅の柱穴から出土した土師質土器小皿（37）1点を図示することができた。

出土遺物

土師質土器（Fig.23－37）

小皿の破片であり，口径9.0cm，器高1.8cm，底径4.6cmを測る。底部から内湾気味に立ち上がり，体部中位に屈曲部を持つ。口縁部は外傾し，端部は丸くおさめる。器面は摩耗が著しく，調整は不明である。

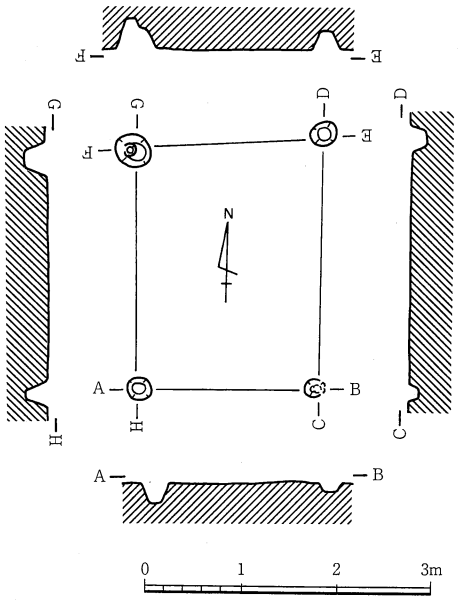


Fig.22 SB－3

SB－3

B区中央部で検出された梁間1間（1.9～2.0m），桁行1間（2.6m）の南北棟建物である。SB－2の南に近接し，SB－4とは重なっている。面積約4.9m²と狭い。棟方向はN－1°－Wである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10～15cm程度とみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色粘質土であった。遺物は各柱穴から出土しており，各器種の総点数は58点で，内訳は弥生土器片6点，土師質土器片47点，瓦器片5点である。そのうち南西隅の柱穴から出土した瓦器（38）1点を復元図示することができた。

出土遺物

瓦器（Fig.23－38）

椀の口縁部片であり，口径15.0cmを測る。内面には円圏状のヘラ磨きが4条認められる。口縁部外面はヨコナデ調整，体部には指頭圧痕が残る。胎土は比較的粗く，0.4cm以下の砂粒を含む。焼成は不良で，摩耗が著しく，色調は灰白色を呈する。

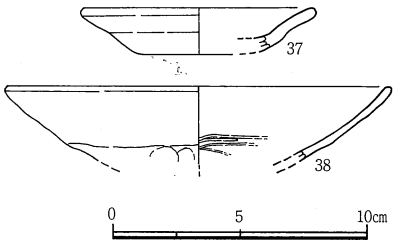


Fig.23 SB－2・3出土遺物実測図

SB－4

B区の中央部西側で検出された梁間1間（1.6～1.7m），桁行2間（2.5～2.6m）の南北棟建物である。ただしこの建物は未調査区に広がり，梁間1間×桁行2間以上の建物になると考えられる。また西側柱中央の柱穴は確認できなかったが，後者の柱穴は近世の暗渠設置時に破壊されたと

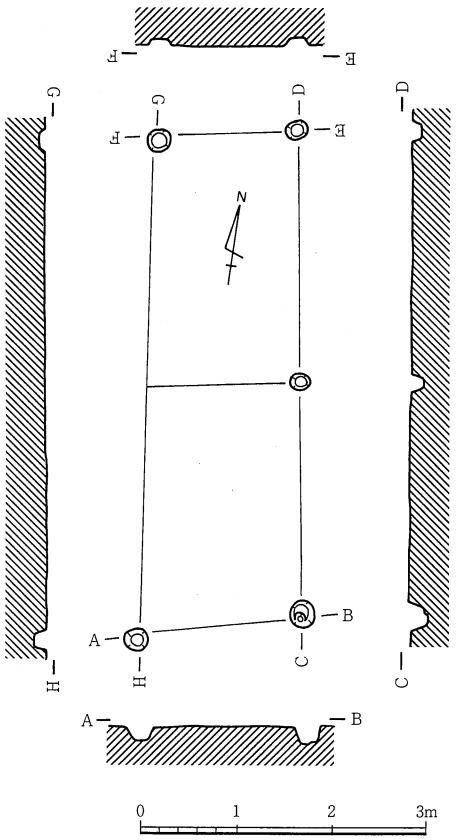


Fig.24 SB－4

みられる。棟方向はN−7°−Wを示す。柱間寸法は梁（東西）が1.5m，桁行（南北）が2.2〜2.4mである。柱穴は径20〜30cmの円形で，柱径は10〜15cm程度とみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色粘質土であった。遺物はほとんどの柱穴から出土しており，総点数は土師質土器片が53点である。しかし復元図示できるものはなかった。

(2) 塀又は柵列跡

SA−1

B区北半部で検出された。SB−4の北に位置しており，軸方向はN−8°53′−WとSB−4の棟方向とほぼ一致することから，これに付随する施設の可能性が高い。4間分（9.4 m）を検出し，柱間は1.7〜2.0mと区々である。南から1間目の柱穴は確認できなかったが，近代の暗渠によって破壊されたと考えられる。柱穴は径12〜20cm，柱径は10cm程度とみられる。柱穴の埋土は暗灰黄色粘質土であった。遺物は各柱穴から出土しており，各器種の総点数は23点で，内訳は弥生土器片4点，土師質土器片18点，瓦器片1点である。しかし復元図示できるものはなかった。

(3) 溝跡

SD−1

C区の中央部で検出した断面がU字状の溝である。この溝から北には遺構は認められず，中世の生活面と，非生活面とを区画する性格を持つ溝であった可能性も考えられる。幅は西側で約1.2m，段を持ち緩やかな落ち込みをみせる東側で3.4m，深さ50〜57cmを測る。検出長は約7.5mである。埋土は黒褐色粘土で，自然木など若干の植物遺存体が認められた。出土遺物の総点数は56点で，内訳は弥生土器片16点，土師質土器片40点である。そのうち土師質土器(39)1点を復元図示することができた。

出土遺物

土師質土器（Fig.28−39）

杯の破片である。口径14.0cm，器高3.0cm，底径8.6cmを測る。口縁部は直線的に外上方に大きく広がり，端部は丸くおさめる。底部はほとんど残存しておらず，調整は不明である。全体的に摩耗が著しい。胎土は0.1cm以下の細砂粒を含み，色調は浅黄橙色を呈する。

SD−2

C区の南端部で検出された断面がU字状の溝である。検出長約6.0m，幅0.8〜0.9m，深さ29〜38cmを測る。近代の暗渠であるSD−8，10に切られている。埋土は暗灰黄色粘質土である。出土遺物の総点数は68点で，内訳は弥生土器片1点，土師質土器片65点，東播系須恵器片1点，砥石1点である。そのうち図示できたのは砥石(40)1点のみであった。

石製品（Fig.28−40）

砂岩を用いた砥石である。二分の一以上が欠損しているとみられる。上面と1側面を使用している。

SD−3

B区の北端部で検出した，断面が緩やかなU字状を呈する東西溝である。SD−4と埋土もほぼ同

じであり，同時期の溝の可能性が高い。検出長約4.1m，幅1.7～2.5m，深さ48cmを測る。埋土はマンガン粒をブロック状に含む灰黄褐色粘質土，若干のマンガン粒を含む灰黄褐色粘質土，黒褐色粘質土の三層に分層される。基底面近くからは自然木を検出している。出土遺物の総点数は665点で，内訳は弥生土器片177点，須恵器片11点，土師質土器片410点，瓦器片59点，東播系須恵器片1点，白磁片5点，青磁片1点，砥石1点である。そのうち弥生土器（41・42），須恵器（43），土師質土器（44～47），瓦器（48），東播系須恵器（49），白磁（50・51），青磁（52），砥石（53）の13点を復元図示できた。

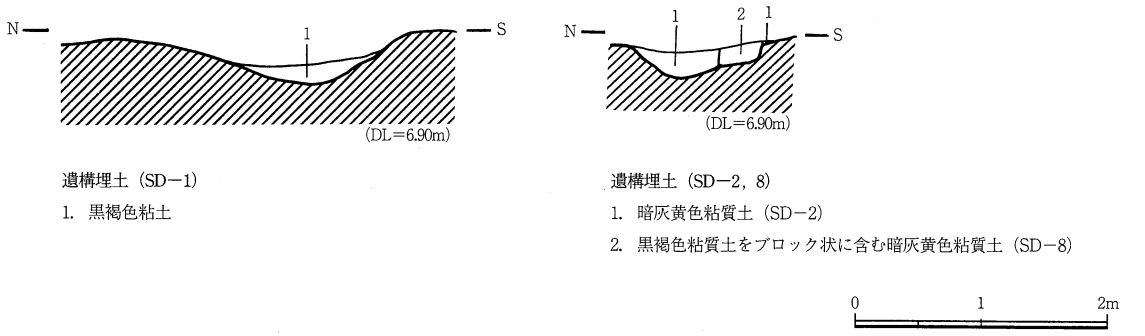


Fig.25　SD－1・2・8

出土遺物

弥生土器（Fig.28－41・42）

41は甕の口縁部片である。細片のため口径は不明である。口縁は緩やかに外反する形態を持つとみられる。口縁部はヨコナデ調整が行われている。焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。42は底部片で，底径は2.6cmを測る。内面に指頭圧痕がみられる。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。

須恵器（Fig.28－43）

鉢の底部片である。底径は13.6cmを測る。器面は回転ナデ調整が行われる。内面には煤の付着が認められる。

土師質土器（Fig.28－44～47）

全て杯の底部片である。44は底径6.6cmを測り，外底面は回転糸切りである。他は回転ナデ調整である。底部から内湾気味に立ち上がり，体部中位から外方向に大きく広がる形態を持つとみられる。焼成は良好である。45は底径6.8cmを測り，回転ナデ調整である。底部中央付近に焼成後約1.0cmの穴を開けており，杯以外の用途に使われたと考えられる。焼成は良好である。46は底径5.4cmを測る。体部下半からやや外反して広がるとみられる。焼成は不良で，摩耗が著しい。44～46はいずれも浅黄橙色の色調を呈する。47は底径5.8cmを測り，外底面は回転糸切りで，板状圧痕がみられる。他は回転ナデ調整である。焼成は良好で，色調は灰白色を呈する。

瓦器（Fig.28－48）

椀の口縁部片である。細片のため口径の復元はできなかった。口縁部外面は一段のヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が残る。内面は摩耗が著しく，ヘラ磨きは不明である。焼成は不良で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

東播系須恵器（Fig.28－49）

椀の口縁部片である。細片のため，口径の復元はできなかった。口縁端部は若干肥厚する。器面は回転ナデ調整とみられる。

白磁（Fig.28－50・51）

50・51とも碗の口縁部片である。細片のため，口径は復元できなかった。どちらも口縁部が直線的に外上方に広がる。釉薬は薄く，0.2㎜程の厚さである。51は胎土に不純物がみられる。

青磁（Fig.28－52）

龍泉窯系の碗の口縁部片である。口径は15.6㎝を測る。内面には界線とヘラ描きによる劃花文がみられる。釉薬はオリーブ黄色を呈する。

石製品（Fig.28－53）

砂岩を用いた砥石である。擦痕のみられる上面以外は欠損している。

SD－4

B区の北部で検出された東西溝である。検出長4.0m，幅0.4～0.6m，深さ38㎝を測る。断面形は逆台形状を呈し，基底面はほぼ平らである。埋土は上面に黒褐色粘質土をブロック状に含む灰黄褐色粘質土の単一層であった。出土遺物の総点数は153点で，内訳は弥生土器片2点，土師質土器片139点，瓦器片12点である。しかし復元図示できるものはなかった。

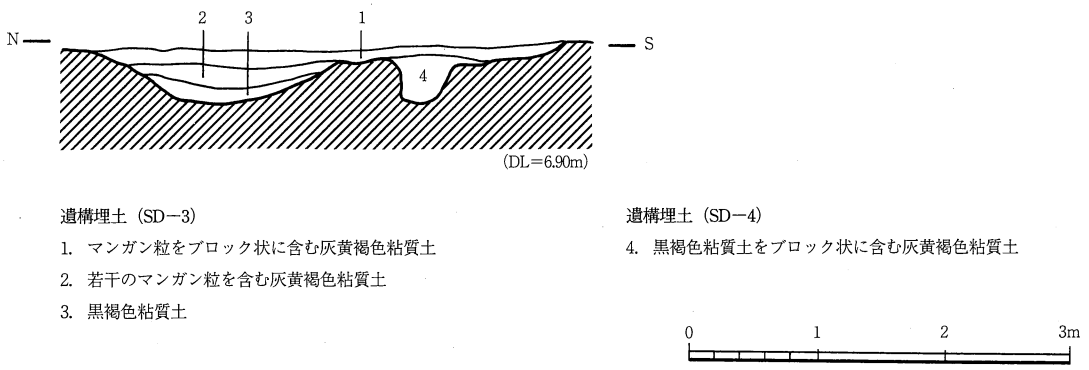


Fig.26 SD－3・4

SD－5

B区南部で検出された東西溝である。検出長約3.5m，幅1.3～2.3m，深さ10～18㎝と比較的浅い。断面形は扁平な逆台形状を呈し，基底面の中央部がやや高く盛り上がっている。埋土は砂混じり暗灰黄色粘質土で，マンガン粒を若干含む。出土遺物の総点数は113点で，内訳は弥生土器片4点，土師質土器片106点，瓦器片3点である。そのうち弥生土器（54）1点を復元図示できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.28－54）

甕の口縁部片である。口径19.2㎝を測る。器面の摩耗が著しく，調整は不明である。焼成は不良

で，色調は橙色を呈する。

SD−6

B区の南端部で検出された東西溝である。検出長約3.6m，幅0.3〜0.7m，深さ34cmを測る。断面形はU字型の変形で，南壁部に段を一段持つ。埋土は砂混じり暗灰黄色粘質土で，マンガン粒を若干含む。出土遺物の総点数は53点で，その内訳は弥生土器片1点，土師質土器片51点，白磁片1点である。しかしその中に復元図示できるものはなかった。

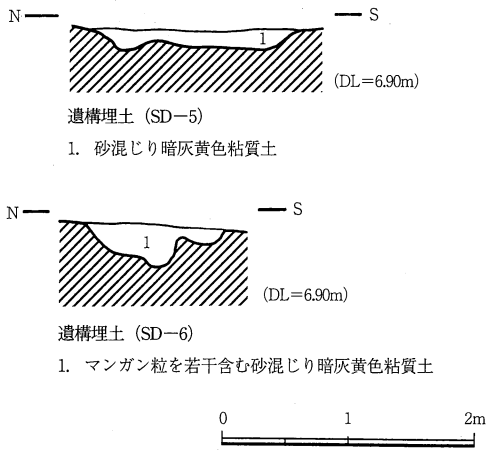


Fig.27 SD−5・6

(4) ピット

P−1

B区中央部で検出したピットである。径20cmの円形で，深さ23cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土であった。出土遺物は土師質土器片14点がみられ，そのうち土師質土器（55）1点を復元図示することができた。

出土遺物

土師質土器（Fig.29−55）

杯の底部片で，底径5.6cmを測る。やや小さめの杯である。外底面は摩耗が著しく調整は不明であるが，器面は回転ナデ調整とみられる。焼成はやや不良で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

P−2

B区中央部の西側で検出したピットである。径22cmの円形で，深さ7cmと比較的浅い。埋土は暗灰

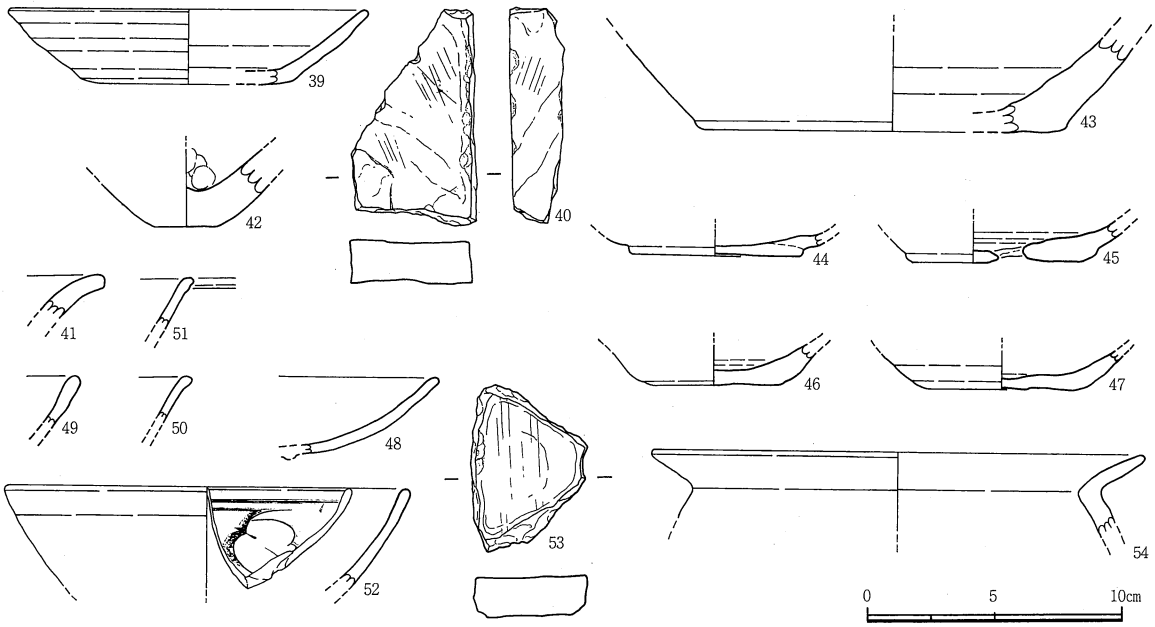


Fig.28 SD−1〜3・5出土遺物実測図

黄色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片7点がみられた。そのうち復元図示できたのは土師質土器（56）1点である。

出土遺物

土師質土器（Fig.29－56）

杯の底部片で，底径6.2cmを測る。底部から内湾気味に立ち上がるが，体部下位より屈曲し外方向に大きく開く。外底部は回転糸切り，他は回転ナデ調整である。焼成は良好で，色調は灰白色を呈する。

P－3

B区南部の東側で検出したピットである。径28cmの円形で，深さ19cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土であった。出土遺物の総点数は12点で，内訳は弥生土器片2点，土師質土器10点である。そのうち復元図示できたのは土師質土器（57）1点である。

出土遺物

土師質土器（Fig.29－57）

57は椀である。口径15.4cm，器高4.6cm，底径7.2cmを測る。底部はベタ高台で，内湾気味に外上方に開き，口縁端部は肥厚する。外底面は回転糸切りで，他は回転ナデ調整である。内面は摩耗しており調整は不明である。焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈する。

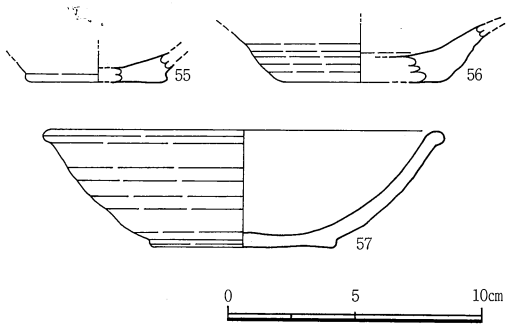


Fig.29　P－1～3出土遺物実測図

3．近代

・調査区B・C・E区で近代の遺構を検出している。B・C・E区は現況が水田であったため，遺構が残存したとみられるが，畑地として使用されていたA・D区は整地のため盛土を行っており遺構は認められなかった。検出された遺構は，東西・南北と縦横に配された暗渠8条である。

(1) 溝跡

SD－7

C区中央部で検出した東西方向に配された暗渠である。暗渠内には土管を用いており，新しいものである。検出長約5.3m，幅30cm程度，深さ20cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土であり，第Ⅰ層から掘り込まれたものである。出土遺物は暗渠施設の陶製の土管のみである。

SD－8

C区南端部で検出した暗渠で，東西方向に配される。SD－9の北に並行して位置する。SD－2を切る。暗渠内の施設には竹管が用いられており，比較的古いものである。検出長約5.9m，幅30cm程度，深さ52cmを測る。埋土は黒褐色粘質土をブロック状に含む暗灰黄色粘質土であった。出土遺物は土師質土器片3点が認められたが，復元図示はできなかった。

SD－9

C区南端部で検出した。暗渠とみられるが，遺構内に竹管・土管等の施設は認められなかった。東西方向に配される。第Ⅱ層から掘り込まれたものである。検出長約5.9m，幅30cm程度，深さ24cmを測る。埋土は若干のマンガン粒と黒褐色粘質土をブロック状に含む暗灰黄色粘質土であった。出土遺物の総点数は37点で，内訳は土師質土器片32点，瓦器片3点，近世磁器片2点である。そのうち土師質土器（58）1点を図示することができた。

出土遺物

土師質土器（Fig.30－58）

小皿の破片である。口径6.0cm，器高1.5cm，底径4.4cmを測る。全体的に小さめで，小皿の小径化の進んだ段階のものとみられる。口縁部は直線的に外上方に広がり，端部は丸く仕上げる。器面は摩耗が著しく，調整不明である。

SD－10

C区の西側で検出された暗渠で，南北方向に配されている。暗渠内の施設には，竹管と葦のような植物が用いられていた。検出長約43.4m，幅30cm程度，深さ11～37cmを測る。調査区の北に行くに従い浅くなる。埋土は暗灰黄色粘質土であった。出土遺物は土師質土器片9点，近世陶器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SD－11

B区の西側で検出した暗渠で，南北方向に配されている。暗渠内の施設には竹管が設置され，その下には葦に似た植物が敷かれていた。C区で検出したSD－10と繋がるとみられるが，ここでは別個に扱う。検出長約30.7m，幅40cm程度，深さ30～53cmを測る。埋土は黒褐色粘質土をブロック状に含む暗灰黄色粘質土であった。出土遺物の総点数は70点で，内訳は弥生土器片2点，土師質土器片61点，瓦器片1点，東播系須恵器片1点，青磁片2点，近世陶器片2点，古銭1点である。そのうち弥生土器（59・60），近世陶器（61），古銭（62）の4点を復元図示することができた。

出土遺物

弥生土器（Fig.30－59・60）

59は壺の口縁部片で，口径16.4cmを測る。くの字状の頸部から外上方に広がるとみられる。内面は端部付近をヨコ方向に，それ以下を斜方向にハケ調整を行っている。外面は斜方向へのハケの後，ナデ調整を行っている。胎土には0.4cm以下の石英粒を含む。焼成は良好で，色調は橙色を呈する。60は口縁部の細片で，口縁端部は肥厚する。内面はナデ調整，外面の口縁端部下はタテ方向のハケの後，ナデ調整を行う。焼成は良好で，色調は橙色を呈する。

近世陶器（Fig.30－61）

碗の口縁部片で，口径13.4cmを測る。釉薬は黒褐色を呈し，約0.2mmの厚さを測る。胎土のきめは細かく，乳白色を呈する。美濃焼の天目茶碗とみられる。

古銭（Fig.30－62）

寛永通寳で，外径は2.45cm，穿径0.59cmを測る。通の始字が「コ」状，寳の末字が「ハ」状になって

おり，背面上には「文」の字が認められる。銅銭で，1668年以降の新寛永通寶である。

SD－12

B区の北端部で検出された。遺構内に竹管等の施設は認められなかったが，形態からみて暗渠と想定される。検出長約1.9m，幅30cm程度，深さ25cmを測る。出土遺物はみられなかった。

SD－13

B区の東側で検出した暗渠で，南北方向に配されている。SD－12を切っている。検出長約37.8m，幅30cm程度，深さ13～32cmを測る。暗渠内には竹管を据え，その周りを3cm程の砂利で覆っていた。約10年ほど前に造られたものらしい。出土遺物の総点数は78点で，内訳は弥生土器片23点，土師質土器片47点，白磁片3点，近世陶磁器片2点，鉄製品1点である。そのうち復元図示できたのは弥生土器（63），白磁（64）の2点である。

出土遺物

弥生土器（Fig.30－63）

甕の口縁部片で，口径14.0cmを測る。粗雑なつくりで，外面は口縁端部付近まで4列の叩き目が残る。内面はヨコナデ調整を行う。また外面には煤が付着している。

白磁（Fig.30－64）

碗の口縁部細片である。釉薬は灰白色を呈し，約0.2mmの厚さである。胎土には若干不純物がみられる。

SD－14

B区の南部で検出した東西に延びる暗渠で，SD－13と繋がる。暗渠内には竹管を据え，その周囲を砂利で覆っており，SD－13と同時期につくられたものである。検出長約3.7m，幅30cm程度，深さ7～14cmを測る。出土遺物はみられなかった。

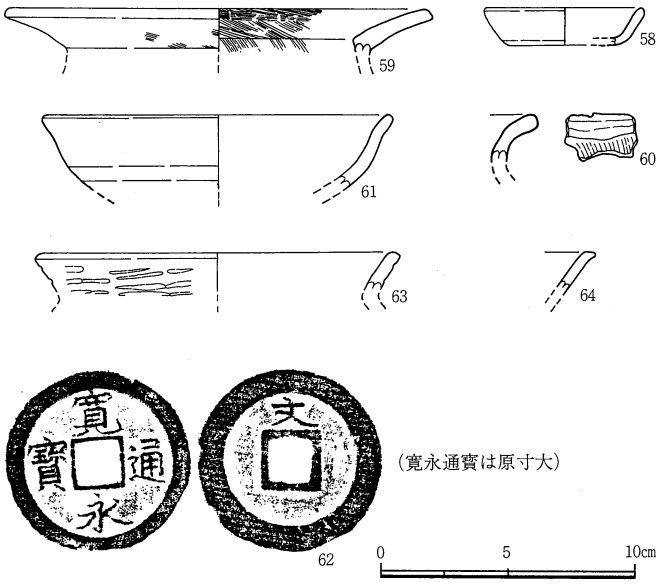


Fig.30　SD－9・11・13出土遺物実測図

第Ⅴ章 まとめ

今回の調査は市道の改良工事に伴うもので，林口遺跡の北西部の調査を行った。

調査区をA～E区に分け調査を行った結果，近世以前の遺構が検出できたのはB・C区である。そのうち柱穴と考えられるピットを検出し得たのはB区のみで，C区の北半部は粘土化が著しい上，遺構の残存は認められなかった。粘土化はさらに北の調査区E区で顕著であった。E区の現況は水田であるが，中世の段階で既に湿地の様相を呈し，地形的に南から北に向かって傾斜していたことが土層の堆積状態から明らかとなった。またB・C区も遺構・遺物の密度は薄く，林口遺跡の中心は調査区の南東部にあるものと考えられる。今回の調査では弥生時代・中世・近代の三時期の遺構が，また遺物は弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の五時期の遺物が確認された。そのうち遺跡の主体をなすのが弥生時代と中世である。以下，弥生時代と中世の遺構・遺物等について若干の所見を記し，まとめとしたい。

弥生時代の遺構は土坑がB区で1基検出されたのみであるが，遺物はB区で出土総点数の約11％，C区では約9％の出土量が認められた。弥生土器は前期～後期まで認められるが前期・中期土器は少数で，これらは流れ込みとみられる。全体的に後期に位置づけられるものが多く，またB区の土坑から出土した弥生土器は後期土器のみで構成されており，林口遺跡は弥生時代後期に一つのエポックがあったものと考えられる。

中世の遺構は掘立柱建物跡4棟，塀又は柵列跡1列，溝跡5条，ピット46個が検出されている。そのうち溝跡以外はB区のみで確認された。中世の遺物の出土量はB区で出土総点数の約53％，C区で約24％とその８割近くを占めている。出土遺物は12～13世紀のものが主体をなしており，この時期に大きな発展を見せたと考えられる。またB・C区の溝跡の基底面からは中世の遺物と共に弥生時代の遺物が多く出土しており，この時期に削平などを含む活発な活動が行われたことを想定させる。

今回確認された掘立柱建物跡であるが，うち3棟は重なっており，少なくとも三時期以上の居住が考えられる。これらの建物がどのようなまとまりを成すのか検討してみたい。4棟のうち，棟方向がほぼ一致するのはSB－1，SB－2，SB－3の３棟である。このうちSB－2・3は近接しており，同時期に存在したとは考えにくい。次に建物の大きさをみてみると，SB－1は梁間2.5m，桁行3.0～3.2m，面積は約7.5～7.9㎡である。SB－2は梁間2.2m，桁行3.0～3.1m，面積約6.6～6.7㎡，SB－3は梁間1.9～2.0m，桁行2.6m，面積約4.8～5.0㎡であり，規模的にSB－1・2は近似している。またSB－2の西側の桁の間にピットが1個あり，対応する東側のピットは検出できなかったものの梁間1間×桁行2間の建物であった可能性もある。SB－1～3は建物の規模としては小さいが，柱間寸法からみて居住用の建物と想定される。SB－4は他の3棟とは棟軸方向が異なり，6度程西に傾く。SB－2・3とは切り合っており時期的に異なるが，出土遺物から新古の判断はできなかった。SB－4はSA－1と軸方向がほぼ一致しており，同時期性が高いとみられる。以上のことをまとめてみたい。

SB－1～4はいずれも住居として利用されたものである。ただしこれらの建物に居住した人物は，階級的に2つのランクに分けることができると考えられる。SB－1～3のような小さな建物に居住し

たのは家人(あるいは家来)のような人々であり，SA－1を伴うSB－4に居住したのは家人よりは若干上層の階級の人物ではなかったかと想定されるのである。またSB－4は若干西に広がる可能性があるが，D区の調査結果からみてD区から西は集落の縁辺部にあたり，屋敷などのある中心部からは北西に外れた場所であったと考えられる。またB・C区で検出した溝跡は，土佐市バイパス関連の調査で検出された北西に向かって延びる堀跡，溝跡との関連も考慮される。

林口遺跡と近接する西の山には林口城跡があり，それに先行する時代の集落がこの周辺にあったのはまず間違いないであろう。

今回の調査では弥生時代・中世の遺構・遺物を中心に，若干ではあるが古墳時代・古代の遺物を確認することができた。このことは当遺跡周辺が弥生時代から今日まで生活の場として機能してきたことを示すものである。検出遺構・出土遺物ともに少ないものの，土佐市の歴史解明の一助となったと言えよう。

Tab.2　出土遺物集計表

遺物	A区	B区	C区	E区	小計	%
弥生土器	1	312	260	1	574	20.29
石庖丁			1		1	0.04
須恵器		17	3	1	21	0.74
土師質土器	1	1,302	640	7	1,950	68.95
瓦器		180	23		203	7.18
東播系須恵器		11	1		12	0.42
青・白磁		15	2		17	0.60
常滑焼		1	1		2	0.07
土製品（土錘）			2		2	0.07
石製品（砥石）		2	1		3	0.11
近世陶磁器		5	6		11	0.39
古銭		1			1	0.04
金属製品（釘）		1			1	0.04
時期不明土器		27	3		30	1.06
合計	2	1,876	941	9	2,828	100
%	0.1	66.3	33.3	0.3	100	

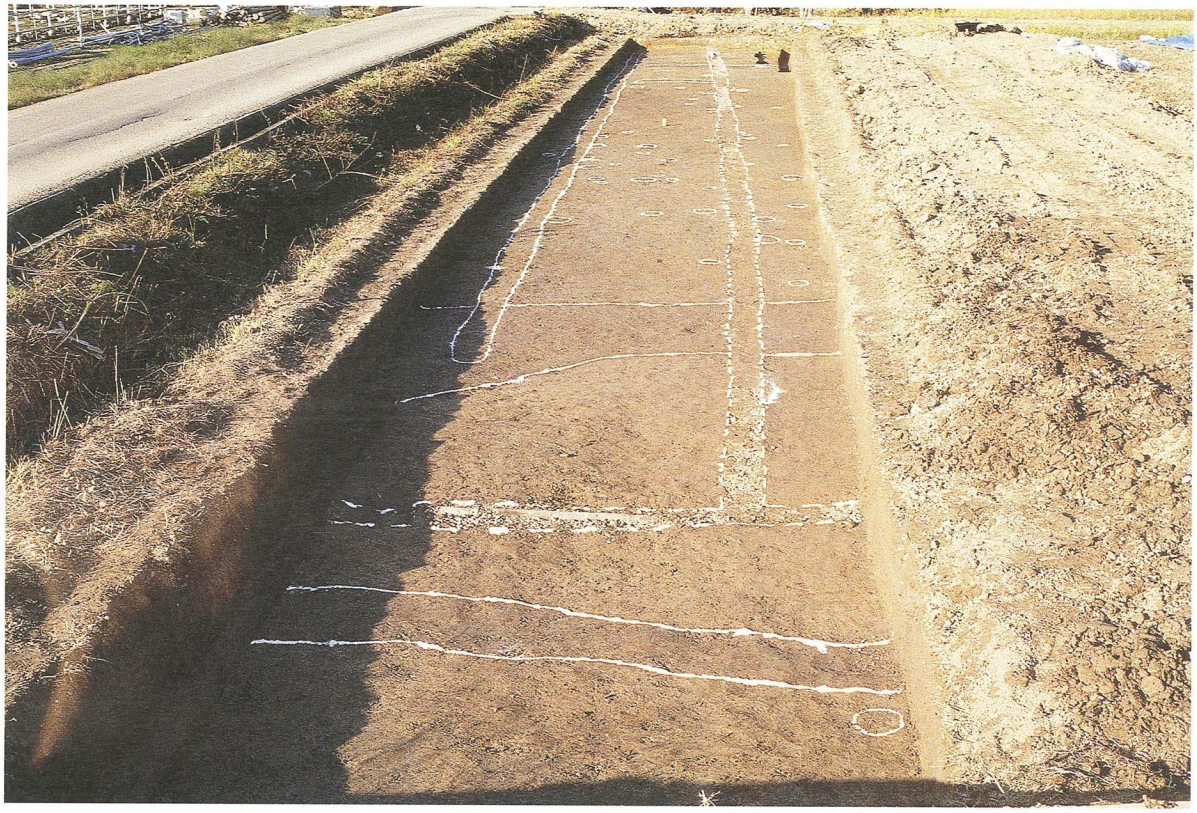
図　版

調査前A・B区全景（北より）

調査前C区全景（南より）

調査前D区全景（北より）

調査前E区全景（南より）

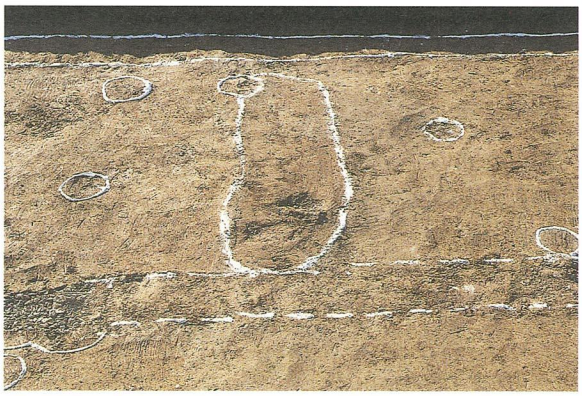


B区遺構検出状態（南より）

B区遺構完掘状態（北より）

C区遺構検出状態（北より）

C区遺構完掘状態（北より）

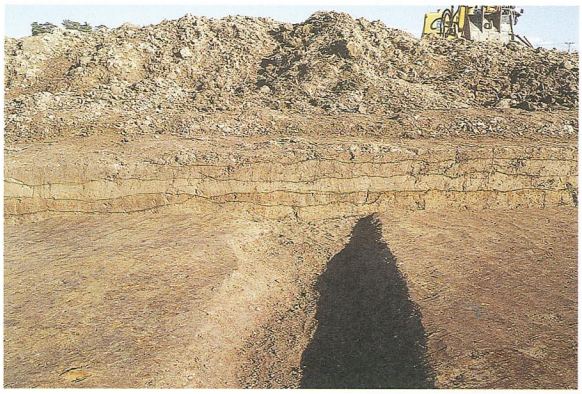


SK－1（東より）

SK－1（西より）

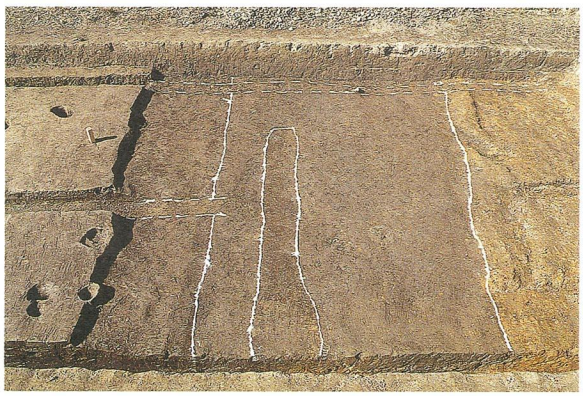
SK－1（南より）

SK－1遺物出土状態（35）

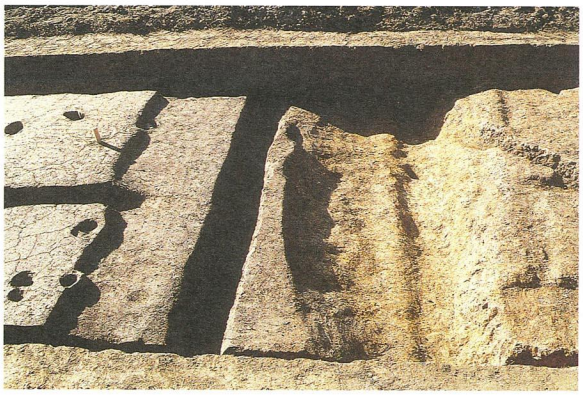


SD－1（西より）

SD－2（西より）



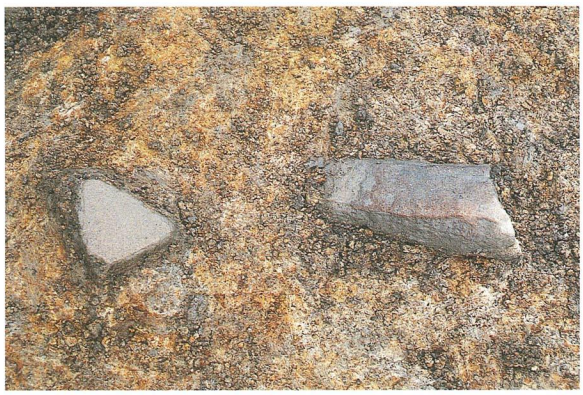
SD－3・4（東より）



SD－3・4（東より）

SD－3遺物出土状態

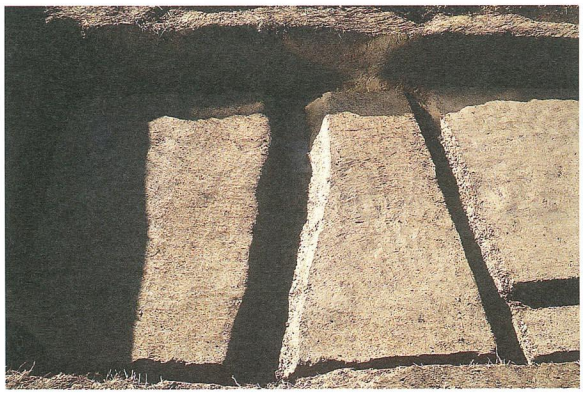
SD－3遺物出土状態（45）



SD－3遺物出土状態（53）

SD－4（東より）

SD－4遺物出土状態（54）



SD－5（東より）

SB－4遺物出土状態（38）

P－3遺物出土状態（57）

35

弥生土器（鉢）

36

弥生土器（甕）

18, 19

弥生土器（甕，鉢）

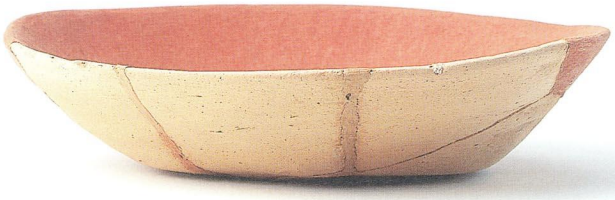
20

弥生土器（甕）

弥生土器（壺，甕）

弥生土器

PL.10



39

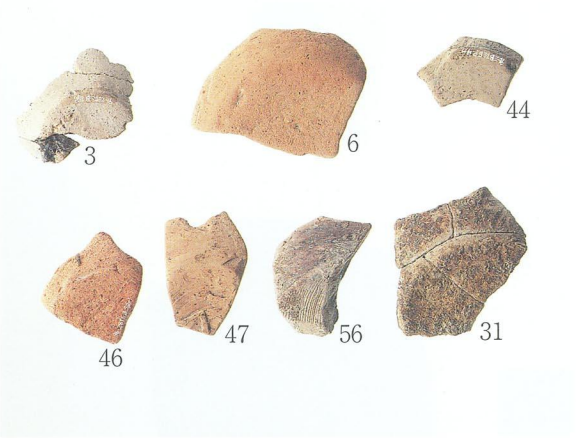
土師質土器（杯）

57

土師質土器（椀）

須恵器（鉢）・東播系須恵器（椀，片口鉢）

青・白磁（皿，碗）



土師質土器（集合・杯）

瓦器（集合・椀）

青・白磁（碗）

土師質土器（杯）

石製品（石庖丁）

石製品（砥石）

13

土師器（椀）

27

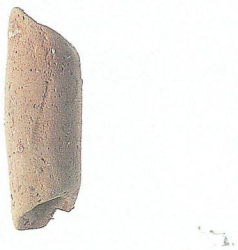
土師質土器（小皿）

28

土師質土器（小皿）

32

土師質土器（杯）



34

土製品（土錘）

61

近世陶器

53

石製品（砥石）

62

古銭（寛永通寶）

報告書抄録

ふりがな	はやしぐちいせき
書名	林口遺跡
副書名	土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	廣田佳久，小野由香，岡本裕介
編集機関	土佐市教育委員会
所在地	〒781-1101　高知県土佐市高岡町甲2017－1
発行年月日	西暦　1997年1月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
林口遺跡 (はやしぐちいせき)	高知県土佐市高岡町林口	950021	050021	33度 29分 45秒	133度 25分 20秒	19961112 ～ 19961218	510	土佐市市道改良工事に伴う事前の発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林口遺跡	集落	弥生 中世 近代	掘立柱建物　4棟 塀・柵列跡　1列 土坑　1基 溝跡　14条	弥生土器 土師質土器 瓦器	弥生時代後期初頭の土坑 12世紀から13世紀の建物

土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

林口遺跡

土佐市々道改良工事に伴う発掘調査報告書

1998.1

発行　土佐市教育委員会
高知県土佐市高岡町甲2017－1
Tel. 0888-52-1111（代）

印刷　共和印刷株式会社